

Handwritten scribbles on the left side of the page, including a large question mark and various wavy lines.





当法人で、東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センターを設置し2年が経ちました。これは、厚生労働省が実施する障害者芸術文化活動普及支援事業の採択を受け、東海・北陸8県を対象に専門的な相談支援や情報共有の場を通じて、障害のある方の創作活動を広めていくことを目的に実施するものです。

平成30年度は5つの県で、支援センターが開設され各地において様々な取り組みが実施されています。半面、対象が広域であるために活動内容にも地域差があります。これまでの事例や方法が通用しないことも多々あります。だからこそ、多様性を認め合うブロックにできないかと思っっています。一つの方向性にまとめるのではなく、それぞれの地域の強みも弱さも生かしたある意味癖のある活動を。その癖を面白がって育てていくことで、画一的ではない輝く活動が将来地域に根付くかもしれません。

一方で、広域センターとしてしっかりと汎用化しなければならない事業もあります。展示会の様子や活動内容を広く伝えるためのアーカイブの方法や、商品化など作家本人への収益につながる出口支援、継続性のある人材育成の仕組みづくりなどを研究しカタチにしていく必要があります。

まだまだ取り組みに不十分な点もありますが、この活動の目的・意義を見失うことなく、変化を楽しみながら大胆な実践をしていきます。そして『成果』を出すことにこだわり続けます。

社会福祉法人みんなできる  
理事長 大島 誠  
平成31年3月

「理解や促し」から「明るさや楽しさ」ですね。  
「かわいそうや大変そう」ではなく「発見や気づき」でした。  
「一方的」より「関係性」でしょ。

この事業に携わったことにより私の中で変わった福祉のイメージです。はじめて言葉だけではなく実践ベースで、対等性を感じることができました。多分、私だけでなくこの事業に関われば多くの方が感じることだと思います。

芸術文化活動は福祉の可能性を広げることを知りました。

福祉が芸術文化活動の可能性を広げることなんとなく分かりました。

こうした言い方をすると腹を立てる方もいるかもしれませんが、福祉側の私はツールとして芸術文化活動を活用していきます。

芸術文化活動を通じて誰かが誰かを気にかけることのできる、そんな社会を一步一歩つくっていかれたらと思います。

東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター  
新潟県アール・ブリュット・サポート・センターNASC  
センター長 坂野 健一郎

6	東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センターの取り組み
7	相談支援
12	人材育成
18	企画展
28	協働事業
32	公開オーディション
34	
54	巻末資料【成果物・情報発信】
56	成果と課題



## わからないの居場所

障害もアートもあまり知らないのだけど

「障害もアートもちょっとよくわかりません」

とはみんなの前ではなかなか言えない。

「障害のある人には優しくしましょう」とか

「美術館では静かに見ましょう」とか

知っているけれど、いざ目の前にしてみると、  
どう関わっていいのかわからない。

なんだか後ろめたい気持ちになって、静かにしている。

(わからないって言えるには?)

「今日も、楽しいなあ」





やっぱり、わかったり、  
わからなかったり

実は障害があります。と言われると、  
お、だからかな。と妙に安心したり、  
え、そうなの。と変に構えてしまったりする。

これアート作品ですよ。と言われると、  
お、アートなのか。と妙に気になったり、  
え、アートなの。と変に立派に見えてきたりする。

障害ある人のアート作品です、と伝えることで、  
なにかが変わる、変わってしまう。  
(そもそも何を変えたかったっけ?)

前年度から引き続き実施している愛知県と、今年度開所した岐阜・富山・新潟・静岡を含め、5つの支援センターが活動したことにより、ブロックセンターへの相談件数は720件と昨年度の4倍以上に急増しました。相談対応の他、現状確認を目的とした巡回、支援センター同士の情報交換の場である連絡会議開催など、今年度のブロックセンターの活動を数字でまとめてみました。

## 数字で見るブロックセンター

### 相談延べ件数

昨年の相談件数 173 件 今年度は 4 倍以上！

平成 30 年度相談実績 **720 件**

東海・北陸ブロックエリア 464 件 ※新潟県を除く

県名	富山	福井	静岡	岐阜	石川	愛知	三重
件数	158	105	72	52	50	21	6

新潟県内 256 件 ※第 19 回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会の問い合わせを含む

### ブロック巡回訪問の実績

①新潟県への巡回数 24 件

②相談の傾向

2017 年度は、作家や家族・施設などからの個別の相談が多くを占めました。2018 年度は個別の相談はほとんどなくなり、各支援センターからの運営や研修会の企画などセンターの運営に関わる相談が主となりました。理由としては、個別の相談は各支援センターで対応される仕組みが整ってきたことが考えられます。広域センターの相談は今後より専門的な内容になっていくことが予測されます。

③巡回

東海・北陸ブロック内における支援センターが開催する協力委員会への出席及び未実施県の行政機関・関係団体事業の周知を行いました。巡回を積極的に行うことで各支援センターの特色のある取り組みや課題を把握することができました。

県名	富山	福井	静岡	岐阜	愛知	石川	三重	
日時	8/3 11/9・10 12/8	8/2 8/17~19 1/12 2/16 3/15・16	9/19 11/16 1/16	7/6 1/17	8/8 2/19 3/18	8/2 12/11 2/28 3/3	8/8 12/1	

第 1 回	第 2 回
日時 平成 30 年 8 月 8 日 (水)	日時 平成 30 年 11 月 9 日 (金)
場所 新名古屋高架新幹線口店	場所 富山県民会館
内容 各県の取り組み報告・情報交換	内容 中間支援組織の基本的役割の理解
参加者数 10 名	参加者数 9 名

実施日	8/8	9/12	10/10	11/14	12/12	1/9	2/13	3/13
相談件数	0件	0件	0件	0件	1件	0件	4件	1件

が行われていました。このことから、相談のニーズはあるが、顔の見えない弁護士に 1 対 1 で電話相談するのはかなりハードルの高い方法であったと考えられます。今後は、個々の電話相談ではなく、権利擁護研修などオープンな形で相談できる機会を増やしていきたいと思っております。

## 1 相談支援の実施

県域の支援センターが増えたことにより、センターの運営に関わる相談が増えました。展示会や研修の企画だけでなく、作品を借りる場合の必要な書式など事務上の問い合わせも多かったです。半面、作家や家族からの相談は、新潟県にも県域センターが設置された影響が減少しました。

## 2 人材育成・研修事業

ブロック圏内の県域センターとの共催、もしくは未実施県での開催を重視しました。また新たな取り組みとして、県支援センター職員を対象とした展示研修会と、この 1 年の実績報告の場としてブロック実践報告会を開催しました。

## 3 調査発掘

情報提供に基づき東海・北陸ブロック内のアーティストの発掘を行いました。

## 4 展示会の開催

新潟県・富山県の 2 会場でブロック展示会を開催しました。東海・北陸ブロック 8 県中 6 県から作家の紹介をうけました。

## 5 公開オーディションの開催

昨年度に引き続き公開オーディションを開催しました。今回は、障害のあるパフォーマーが舞台上に不安なく立てるようサポーターの養成にも挑戦しました。

## 6 情報発信

- ◎HPの更新
- ◎Facebook ページでの情報発信

平成 29 年度に開設した東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター。平成 30 年度はブロック圏内の県の支援センターが 5 つになり各県で様々な取り組みが始まりました。



● 当センター  
● 初年度実施県 - 富山・岐阜・静岡・新潟  
● 2 年目実施県 - 愛知

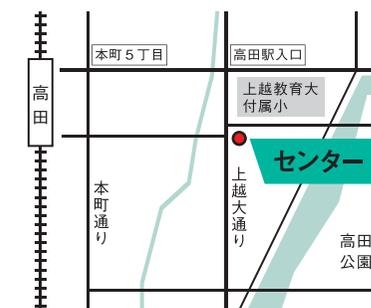
東海・北陸ブロック障害者芸術

文化活動広域支援センターの取り組み

東海・北陸ブロック  
障害者芸術文化活動  
広域支援センター

【上越本部】  
〒943-0834  
新潟県上越市西城町 2-10-25 大島ビル 307 号室  
社会福祉法人みんなていきる法人本部内  
TEL: 025-530-7264 / FAX: 025-530-7261

【人員体制】  
センター長 1 名 (専従)  
事務局員 1 名 (専従)  
アート・ディレクター 1 名 (専従・非常勤職員)  
経理担当者 1 名 (兼務)



## 実施県の取組み

センター名	センター名
愛知県 Aichi Artbrut Network Center 様々な関係者で構成される協力委員会を設置し、事業に参画してもらっている。	静岡県 静岡県障害者文化芸術活動支援センターみらーと 展示会を商業施設で開催し、並行してファッションショーを実施した。
岐阜県 岐阜県障がい者芸術文化支援センター tomoni アートサポートセンター 誰もが自由に創作活動に参加できるオープンアトリエを実施している。	富山県 富山県障害者芸術活動支援センター ばーと◎とやま 富山県内の郵便局と連携したアートプロジェクトを実施している。
新潟県 新潟県障害者芸術文化活動支援センターらーと 次年度新潟県で開催される全国障害者芸術・文化祭のイベントを実施した。	

## 連絡会議の開催

東海・北陸ブロック内における支援センターおよび未実施県の情報交換の場として連絡会議を開催しました。

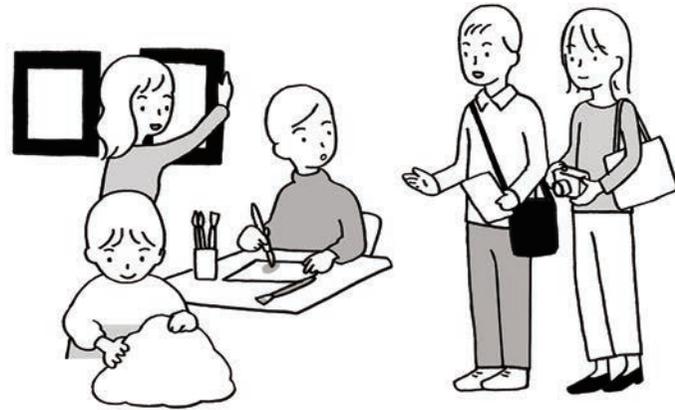
## 無料法律相談

弁護士：見竹 泰人 氏 (みたけ法律事務所)

障害のある方の創作活動に係る権利保護のための無料法律相談を 8 月から月に 1 回実施しましたが、相談ゼロの月が多く有効に活用してもらえませんでした。電話ではなく、弁護士を招いた研修会形式の相談会では、施設職員や当事者から様々な相談が寄せられ、活発な質疑応答



## 相談事例 2



### 障害者アートについて特集したい

#### 相談者

地域の情報誌の編集部スタッフ

#### 相談内容

地域の情報誌（フリーペーパー）を発行している。毎回巻頭特集で地域の方やものごとを紹介している。今後、障害者アートをテーマにした特集を掲載したいと思っており、配布エリアで障害者アートに関する活動をしている人や場所などの情報を教えてほしい。

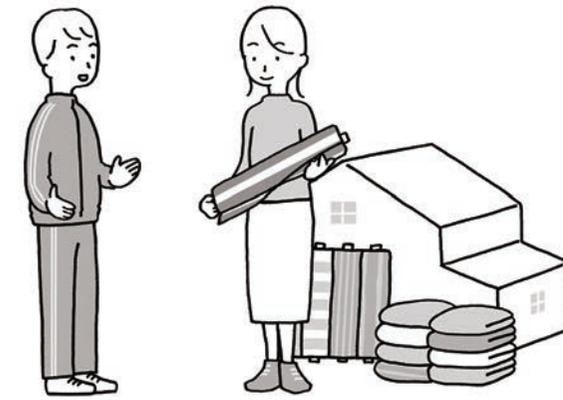
#### 対応

当センターと交流のある作者が配布エリアにもいることを伝える。ぜひ会って話を聞きたいということだったので、当センターが作者の母に連絡をし、依頼内容の説明とアポイントの可否を確認。作者の母もぜひ取材に協力したいということだったので、当センターも同行し編集部スタッフと作者の自宅を訪問した。自宅の2Fでは障害者アートの絵画教室を定期的に行っており、その様子取材し巻頭特集で紹介することになった。2018年11月号の巻頭特集に掲載された。



## 相談事例 1

昨年度までは、創作活動をしている当事者やその家族、施設職員、福祉行政の関係者からの相談がほとんどでしたが、今年度は展示会に来場した一般のお客様や福祉業界以外の組織など、これまで接点のなかった方々からも相談が寄せられました。相談事例からも障害とアートへの興味関心の広がりを感じる一年でした。



### 自宅にある生地を寄付したい

#### 相談者

展示会の来場者

#### 相談内容

アール・ブリュット展に来場した会場近隣に住む女性。会場内に展示されていた布製の作品に感銘を受けて架電した。昔、デパートの服地売り場で働いていて、その時に個人的に集めていた生地が自宅にたくさんあるので障害ある方に生地を寄付したい。生地はどれも新品だが大きさや柄は色々あるので欲しい方がいたら一度自宅に見に来てほしい。生地を欲しい方はいないだろうか？

#### 対応

当センターから創作活動に熱心な施設の担当者に連絡し寄付の情報をメールで伝える。施設担当者から、今後の創作活動の材料を考えていたところで、ぜひ生地をいただきたいとの返信があった。当センターから寄付を申し出た女性に取り次ぎ、施設担当者となつないだ。その後、施設担当者から生地を受け取りに行く日が決まったと連絡があった。



## 相談事例 4



### 誰もが興味を持てる研修をしたい

#### 相談者

静岡県障害者文化芸術活動支援センター みらーと 職員

#### 相談内容

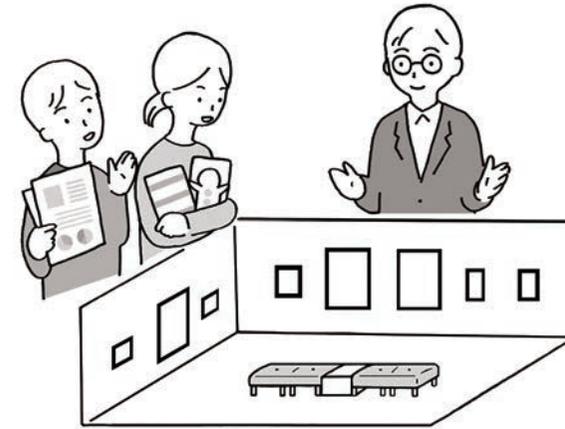
支援センターの初めての研修事業として、ハードルの低く誰もが興味を持てる内容の研修会を実施したいのだが、どのようなものが良いか教えて欲しい

#### 対応

相談者と話をする中で、サポートセンターを運営するオールしずおかベストコミュニティは、就労支援や授産品の相談などを行っている団体であるため、写真についての講座であれば、これまで関わりのある商品づくりに関心のある施設も、まだ関わったことのない作品づくりに関心のある施設や家族にも、共通するテーマなのではないかという案が出る。写真家でもある本センターアートディレクターがプログラム作成。“スマホで撮影 基本テクニック”として、作品や商品の撮影の際に気をつける、カメラの位置や撮影場所など、その日に誰もが身に付けられるような技術のレクチャーを講義とワークショップ形式で行った。



## 相談事例 3



### アール・ブリュットの展覧会を開催したい

#### 相談者

新潟県内にある美術館館長

#### 相談内容

アール・ブリュットに関心があり、平成 31 年度に展覧会を開催したいと思っている。アール・ブリュットについて詳しく知らないので話を聞かせてほしい。作品の状況や展覧会にかかる費用についても教えてほしい。

#### 対応

美術館を訪問し館長とスタッフの方に、当センターで関わったアール・ブリュット展の様子を紹介しながら作品や国内での展示会の状況を説明。どんな作品を展示したいかによって、費用はかなり変動することを伝える。全国的にも著名な作品を集めた展覧会をしたいという希望だったので、当センターでこれまで企画した展示会の費用をベースに伝えたところ予算的にかなり厳しいとのことだった。その後、美術館内部で検討した結果、予算が十分に確保できる状況での開催が望ましいと判断したと連絡があった。平成 31 年度の開催は見送り、平成 32 年度以降で状況をみつつ検討していくとのことであったため、必要に応じて今後も相談にのっていくことにした。



## 東海・北陸ブロック 会議の開催

支援センター担当者を対象にブロック会議を開催しました。東海・北陸ブロック内では平成29年度と比較し支援センターの数が1から5に増えたこともありとてもフレッシュな顔ぶれとなりました。これから事業を進めていく上で、必要とする情報は大きく分けて①記録の方法、②講師、③舞台芸術の進め方の3点が挙がってきました。



### 主な議題

#### ① 記録の方法

事業がやりっ放しにならないようしっかり記録をとり、外部に伝えるツールであったり効果測定に活用したい。ただし、現状は事業に追われてアーカイブ作業が手薄になってしまう。特に展示会や舞台においてよい企画を実施しても、記録として外部に伝わる形で残っているものが少ない。作家やパフォーマーへのリスペクトが感じられない。

#### ② 講師

良い研修会を実施したくても近くに適任となる講師がいない。新しい分野の取り組みであるため福祉の現場とアートの双方に見識のある人材が少ない。広域で講師のリスト化を進めると同時に講師になりえる人材を育てていく必要がある。半面、施設からアート活動を取り入れたいので講師を紹介してほしいという相談が増えている。大半の事業所が講師謝礼の予算を見込んでおらず、かつ利用者本人のためではなく事業所の売りとしてアート活動をはじめたい意図が見える。アート活動に興味を持ってもらえることは良いことだが、それが目的化してしまうと本末転倒となってしまう。安易に講師を紹介するのではなく中間支援組織としてどのように対応していくか考える必要がある。

#### ③ 舞台芸術の進め方

舞台芸術という言葉に敷居の高さを感じる。時間をかけてステージパフォーマンスを仕上げ発表する機会を設けなければならぬイメージが強い。特定のグループ、団体を作っていくことは中間支援組織の役割との相反する部分がある。多くの方がパフォーマンスを楽しめる機会を作っていくことが必要であり、そのためにはアクセシビリティといった環境整備、参加対象の間口を狭めないことが重要である。また、舞台芸術という表現ではなく身体的表現という文言にする敷居が低くなる。集客についても工夫が必要である。

他、イベントや団体の周知を依頼された場合に対応する基準や、学生の巻き込み方、作品を販売したいという相談への対応、他分野との連携など様々な情報交換が行われました。多分、次も同じような内容が議題に上がってくると思います。少しでも少しずつ変化はあるはずです。小さな前進をしっかりと積み上げていきます。



富山県高岡市にて、富山県障害者芸術活動支援センターぱーと◎とやまと協力しアートディレクター養成研修を実施しました。

まず米田代表より、障害のある方の創作活動の現状についてお話がありました。美術表現だけは経験やスキルが評価に直結せず、障害の有無に関わらず最も同じ土俵で戦えるのはアートの世界なのではないかと。ただ、一般のアーティストと違い障害のある方は自ら発信することがあまりなく、家族や施設職員などとの関係性によって世に出ていくと説明がありました。そうして世に出た独特の表現や自身の内面を映し出されているオール・ブリュット作家の層を盛り上げていくことで、障害のある方の創作活動全体が盛り上がっていくのではと提言がありました。

後半はデザインオフィス IDEKO 小出代表よりこれまでの展示会を通じて、会場のレイアウトや什器をアートディレクターと相談しどのように決めてきたか事例報告がありました。照明や空間の余白といった基本的な知識から、展示空間をイメージしていく上で重要なポイントをいくつか示唆いただきました。なぜピンクの台座や琴の譜

面台のような什器を作ったのか、作家とのかかわり方を通じて報告がありました。

米田代表からも西洋建築と比較し、日本家屋はあらゆる場所に作品を飾れるしつらえになっており、コードを隠す場所もたくさんあるなど展示会場としての優位性を説明いただきました。

その後、参加者が持ち寄った作品を展示してみました。百円均一で売っているものも展示方法やワンポイント工夫を加えるだけで作品の魅力が十分に引き出せることが分かり、会場はとても盛り上がっていました。初めてぱーと◎とやまの研修会に参加された方や、新たな作家の情報の提供もありじわじわとアートのネットワークが広がっていきそうです。



## アートコミュニケ4 アート支援実践のための研修会

日時：平成30年12月8日（土） 参加者：13名  
講師：米田昌功（富山県障害者芸術活動支援センターぱーと◎とやま代表）

小出真吾（デザインオフィス IDEKO 代表）

# 障害のある方の 創作活動に係る 事例検討会

昨年度に引き続き2回目となった「権利保護」についての研修会。弁護士の方から障害のある方の創作活動に係る権利の基本的な内容について解説をいただいた後、実際に福祉施設の現場で抱えている事例について検討し、弁

護士の先生からアドバイスをいただきました。今回は事例検討だけでなく、展示会出品の際の承諾書や、作品を使用し商品を作る際の契約書など、今後必要となる可能性が高い書類のひな型についても検討しました。



弁護士 見竹泰人氏

## 検討した事例 (一部)

**Q1** 利用者の作品を貸し出すなど作品を活用して対価が発生する場合、事業所としてどのような立場で契約書に明記すればいいのか？

**A1** 借りたい方と作者が直接契約するのが基本。作者の代理をする場合は、作者本人と施設の間での代理の契約が必要になる。代理としてどういった代理権をもつのか？ その内容を詰めていくことが必要になる。単に、借りたい人からこういう条件で話が来ています……という取り次ぎだけであれば代理契約は必要ない。

**Q2** 作品を売買する場合、どうやって金額を設定したらいいのか？

【見竹弁護士から法律の視点で回答】

法律的に言うと制限はない。売る側と買う側の双方が合意していれば基本的に問題はない。一般的にはどのくらいの金額で取引されるものなのか、他の事例を参考にするとよい。

【ブロックセンターから日本の現状を紹介】

**A2** 障害ある方の作品について市場の価値が定まっていないのが現状。売買するときの基本姿勢として、作者が売りたい作品は売らないのが大前提。作品の中で記念的要素があるものは売らないようにしている施設もある（初めて書いた、転機になった作品など）。販売価格の事例としてクシノテラスのHPを紹介。

**Q3** 施設で預かっている作品がある。量が多くなり保管スペースがなくなってきたので、作者の家族に相談したところ施設で処分していいと言われた。作品を処分する際に注意すべきポイントを教えてください。

**A3** まずは処分の意味を明確にする。処分＝廃棄でOKか？ 確認する必要がある。廃棄することを施設に委託することになるので、委託することについての書面を作っておく必要がある。何を何点廃棄するのか具体的に明記しておく。廃棄となった時に、どうせ捨てるんだから、もったいないから利用してしまおう！はNG。利用する場合は作者に承諾を得る必要がある。

**Q4** 障害ある方から「作品をもらってくれ」と言われた。作品をもらう際は、どのような書面を交わしたらいいのか？「寄付」「寄贈」「贈与」などいろいろな言葉があるが言葉の違いも教えてください。

**A4** 一般的には「寄付」はお金を対象、「寄贈」はモノを対象だが、法律的には「贈与」という言葉でまとめられている。書面は、贈与するということがはっきりしていて、「何を贈与するのか（作品の特定）」、「作品の著作権も譲渡すること（著作権法27条・28条の権利を含む）」、「著作者人格権を行使しないこと」、この3つが明記されていれば基本的に問題はない。

### 実施概要

【日 時】平成 31 年 2 月 4 日（月） 13：30～16：30  
 【場 所】新潟ユニゾンプラザ研修室  
 【参加者】10 名  
 【講 師】見竹泰人氏（みたけ法律事務所 弁護士）  
 【内 容】権利保護に関する基本講座（見竹弁護士）  
 事例検討 4 件  
 承諾書等ひな型チェック講座



## ブロック展示研修会の開催

東海・北陸ブロック内の支援センター職員を対象に展示研修会を開催しました。新潟・富山の2会場それぞれ展示什器の設営や作品の展示を行いました。展示作業そのものよりも担当者同士が、一緒に手を動かして、交流を図れたことが一番の収穫でした。

富山会場の2日目では、座学中心の研修会を実施しました。中間支援組織の基本的な役割や空間デザイナーによる展示空間のディレクションの話、福祉現場の相談員から基本的な福祉の制度と相談スキルを学びました。ここでも座学の時間よりも、質疑応答や情報交換の時間の方が長く交流がメインとなりました。ブロックの範囲が広大なだけに、取り組みにも地域差があります。相談の内容や、センターの実施体制にも差があり、よりブロック内でフォローし合える仕組みづくりがブロックセンターに一番求められていることなのではないかと思われました。そのために、画一的な話ではなく、センターの実務に即した情報の共有が必要だと感じました。支援センターの職員が気軽に話せ、出席しやすい環境を整えていきます。

	新潟会場	富山会場
日時	平成 30 年 10 月 5 日（金）～6 日（土）	平成 30 年 11 月 9 日（金）～10 日（土）
参加人数	4 名	8 名
1 日目	展示作業・什器の設営・会場下見など	
2 日目	①全体ミーティング ②展示会場の受付・誘導 ③展示会場内巡回 ④和太鼓パフォーマンスの視察	①中間支援組織の基本的役割の理解 講師：ブロックセンター職員 ②展示空間のディレクション 講師：IDEKO 代表 小出 真吾 氏 ③相談支援の基本的理解 講師：社会福祉法人まき福祉会 今井 正人 氏



2 日間に亘り、東海・北陸ブロック内の支援センターの実践報告会を開催しました。各センターより実施した事業内容とその成果や課題についての報告を受け、共有・分析を通じて次年度の事業に反映させることが目的でした。文化活動家のアサダワタル氏、写真家で映画監督である大西暢夫氏、先進事例として認定 NPO 法人コミュニティリーダーひゅーるぼん理事長の川口隆司氏からの講演もあり様々な学びの機会となった 2 日間でした。

この 1 年間の成果をさらに前に進めるために、中間支援組織としてのあり方の整理やアーカイブや事業評価の方法など、次年度重点的に実施する必要がある取り組みが分かりました。

## ブロック実践報告会

日時：平成 31 年 3 月 15 日（金）～ 16 日（土）  
場所：北ノ庄クラシックス（福井県福井市）  
参加者：15 日：36 名、16 日：32 名

## 評価委員会

日時：2019 年 3 月 18 日（月）  
場所：カネジュービル（愛知県名古屋市中区）  
出席者：垣尾良平氏（社会福祉法人中日新聞社会事業団常務理事）  
今泉岳大氏（高浜市やまの里かわら美術館学芸員）

人材育成

ブロックセンターの全事業終了後に評価委員会を開催し、2018 年度の事業評価を受けました。委員からは、ひたすら人材育成を実施していくことの重要性和、アーティスト自身のつながりが広がるために巡回展など展示の機会が増やす取り組みが必要ではと次年度事業に向けての助言をいただきました。最後に『残す』ことにもっと意識をしてほしいと話がありました。これまでも数多くのアーティストが活躍していったが 100 年後の世界で残っている方は一かからであり、この事業の成果が歴史として残るよう努めてほしいとアドバイスももらいました。



## アートディレクター養成研修 in 金沢

日時：平成 31 年 3 月 3 日（日）参加者：25 名  
講師：早川潤（中島史雄法律事務所弁護士）  
宮下忠也（アートディレクター・フリーランス）  
角地智史（東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センターアートディレクター）

人材育成

石川県金沢市にて、はてな Labo と協力しアートディレクター養成研修を実施しました。はてな Labo は石川県内の拠点を置く、はてな工房山の家、愛育学園、ジヨブスタジオ・ノームなどの中心となり、事業所がアートをとおして現場での支援の方策を考えるネットワークです。

今回の企画は、はてな Labo から障害のある方の創作活動を進めていく上で必要な知識を全般的に学べるプログラムにしたいと要望があり、権利保護・作家との関わり方や展示の方法などを学ぶ機会としました。

早川弁護士からは障害の有無に関わらず必要な基本的な著作権の概論、後半は現場の事例をもとに質疑応答の時間となりました。質問が連なり、予定の時刻を過ぎても活発な意見交換が交わされました。特に『所有権』と『著作権』の整理

に関わる質疑が多かったです。著作権は、作った瞬間に作家本人に帰属することを原則に、本人に対して何が権利侵害なのかをしつかり事業所として考えていく必要性を認識することができました。

アートディレクターの宮下さんから、これまで関わった展示会を通じて作品そのものだけでなく、その作品が生まれている環境や過程に魅力を感じたケースがいくつもあったとのこと。作品と一緒に創作環境を再現して展示をすることで、より作品の魅力や作家本人への関心が高まるのではとお話がありました。

今回の研修を通じて、石川県内では福祉施設における著作権に関わる研修のニーズが高いことと、展示や発表の機会を求めている事業所が多いことが把握できました。次年度の事業にしっかりと反映していきたいです。

## 地域にある展示

フリーアナウンサー 谷口菜月

2018 年 11 月 10 日から 18 日にかけて富山で開催された展示会『HEART』の中の ART』を視察。会場となる富山県民会館分館『金岡邸』は、富山地方鉄道の小さな駅から 5 分ほど歩いた、閑静な住宅街の中にある。これまでの富山での展示会は、高岡市美術館や県民会館のギャラリーなど、いわゆる展示のための場、ある意味、無機質な空間に飾られていた。しかし、今回初めて、金岡邸という人の生活に密着した空間に置かれ、これまで何度も見ていた作品の表情がこんなにも違って見えるのかと驚いた。作品と一対一で向き合うのではなく、

地域に根差したものにするためには、こういった地元で長く愛されてきた場所をどんどん活用すべきだと思う。そのためにはやはり、富山県による経済的支援や、東海・北陸ブロック全体の協力が欠かせないと思う。

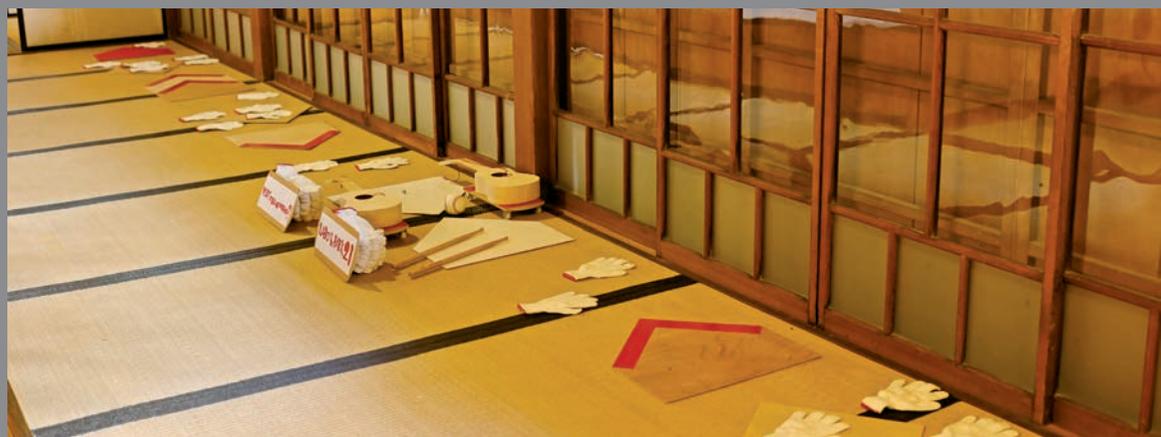
富山において、年に一度の企画展や巡回展のようなものは、大変安定してきた。東海北陸ブロックという協力体制を生かすことで、人々を魅了する作品も充実している。今後は、そのような企画展でオール・ブリュットの魅力を伝え、同時に、滋賀県の N O M A のような常設の場を設け、作品を地域に溶け込ませていく段階に入っていくべきではないだろうか。最終的には、作品が、さりげなく、いつもそこにあるような存在になってほしいと願う。

風情のある室内建築や美しい庭園を背景に、一枚の写真として切り取られるようであった。また、ひと部屋にひとつの作品を展示するなど、空間を贅沢に使い、作者や作品を大切に思う優しさが感じられた。

今後、ただの展示場でない金岡邸のような空間で展示会を開催してほしいと願うが、集客力が課題になると想像する。もちろん観客あってこそその展示会だが、オール・ブリュットをよ



谷口菜月  
大阪府出身。元チューリップテレビ（TBS 系・富山県）アナウンサー。タワのニュース番組のキャスターを務めながら、富山県のオール・ブリュット現状や課題を長期にわたって取材。障害者アート支援工房「ココベリ」に通う作家に密着した特集を複数回放送したほか、先進地・滋賀県にも運び、富山県における支援のかたちを模索・提案してきた。現在は東京でフリーアナウンサーとして活動している。福祉イベントやトークセッションの司会も多数担当。圭三プロダクション所属。



HEARTの中のART / 薬種商の館 金岡邸 富山

上越アートプロジェクト / 浄興寺 新潟

# 6つのプロジェクト

## アール・ブリュット in 上越4

10月6日(土)～12日(金)  
新潟県内の他、東海・北陸エリアから選りすぐりの作品を展示。鑑賞の仕方がわからない方にもお薦めの対話型鑑賞会も実施。

## 障害とアートに関する講演会

ゲストを迎え、アール・ブリュットin上越4の期間中に、障害とアートに関する講演会を開催。

## 美術館におけるアール・ブリュットについて

10月6日(土)  
話し手：高浜市やきもの里かわら美術館 学芸員 今泉岳大氏

## 当事者の声～表現と発達障害について～

10月8日(月祝)  
話し手：発達障害の当事者グループ代表 齊木靖子氏

## 音楽LIVE

「わからないの居場所」のコンセプトにちなんで不思議な楽器「ハンドパン」と「テルミン」のLIVEをアール・ブリュットin上越4の期間中に開催。

## 次世代楽器 ハンドパン

10月7日(日) 奏者：久保田リョウヘイ氏

## 世界最古の電子楽器 テルミン

10月8日(月祝) 奏者：街角マチコ氏

## もちより作品展

### マイプレイステーション ～私の遊び場～

10月6日(土)～12日(金)  
「遊び」をテーマに、当事者や家族、施設職員が作品を持ち寄り自主展示。来場者は実際に作品を手にとって遊びながら障害のある方々の日常の様子を体験。

## ワークショップ

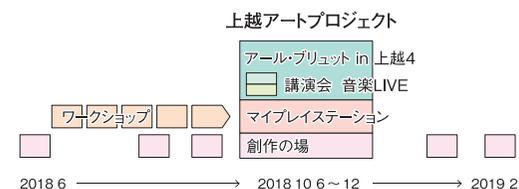
### おせっかい道場

～アート作品をプロデュースしたい人・された人、集まれ!～  
7/28、8/18、9/8、9/22、10/4・5(全5回)  
自分の視点だけでなく他者の視点を通して、より幅広いものの見方や伝え方を学ぶことを目的として、対話型鑑賞会や写真講座、展示講座などを実施。講座で学んだことを実践する場として、10月6日～12日のもちより展で自主展示に挑戦。

## 創作の場

### みんなでわいわいあーとなじかん

6/30、9/8、10/6～12、12/9、2/23(全5回)  
障害者も健常者も一緒に絵を描いたり作品を作ったりする場を定期的で開催し、居場所/コミュニティの形成や、新しい出会い、情報交換の機会に繋げた。



**多様な文化プロジェクトへの転換**

平成27年・28年・29年と開催してきたアール・ブリュット展。昨年度は地域色ある展示会を目指し、町屋を会場に地域の方々の作品も多数展示しました。自主展示を希望する方を対象にしたワークショップも開催し、主催者側と出品者が協働で展示会を作ったことにより、福祉とアートに関するコミュニティが生まれました。

しかし、展示会来場者の割合としては福祉関係者、美術関係者が多く、まだまだ一般市民の方に広がっていない状況でした。その後、市民へのヒアリングを通して「福祉もアートもよくわからないけれど、わからないとは言いつらい為に理解できない、楽しめない…」という現状が見えてきました。

そこで今年度は、より多様な方への理解を深めるために「わからないの居場所」をコンセプトに、展示会だけでなく福祉とアートに関わる様々な文化事業を「上越アートプロジェクト」として展開。創作の場、音楽LIVEや講演会など様々な機会を作ることで、より多様な関係性とコミュニティの発展を目指しました。

## わからないの居場所

「障害もアートもちょっと、よくわかりません」とはなかなか言いづらい雰囲気がある(だって大人でしょう)

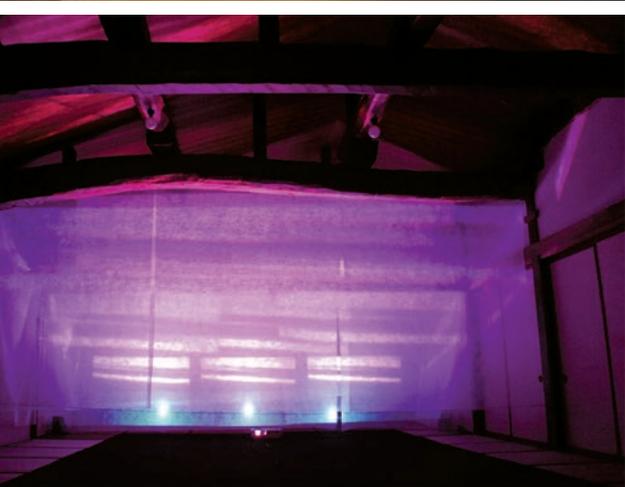
「ちょっと、よくわからないんですよ」と口に出して言ってみると。すると「こんな見方があるらしいですよ」と知っている人が教えてくれる。あるいは、「分かんないですよー」と隣の人が頷いてくれる。

それで、分かることもあれば、分からないままのこともあって、でもそうやって、ちょっと口に出して言ってみることができる場所。誰かが聞いてくれたり、頷いてくれる時間が作れないかなと考えています。

(上越アートプロジェクトディレクター 角地智史)

# 上越 アート プロジェクト わからないの居場所

企画展



企画展

アール・ブリュット作品展示

# アール・ブリュット in 上越4

期間：10月6日～12日 10：00～15：30  
会場：浄興寺 庫裏

### 東海・北陸ブロック間の連携にチャレンジ

昨年の寒さを教訓に開催日を10月6日～12日に早めて実施。会場は親鸞聖人の御頂骨が安置され、重要文化財にも指定されている浄興寺。歴史と風格ある寺院を舞台に、新潟県内だけでなく東海・北陸エリアから作家を紹介していただき、ブロック展示会として開催しました。作家数は、新潟・富山・石川・福井・愛知・岐阜の6県から合計20名。また、作品セレクタや展示構成などのディレクションを富山県障害者芸術活動支援センター ばーと◎とやまの米田昌功代表に依頼し、新潟×富山の協働作業でアール・ブリュット展を作り上げていきました。

### 展示研修

10月5日の搬入・展示作業は、東海・北陸ブロックの展示研修会として実施しました。実際に手を動かしながら学ぶ貴重な時間となりました。

### 対話型鑑賞ミニツアーを実施

NPO法人芸術資源開発機構 ARDA 正会員の田辺梨絵さんをナビゲーターに迎え、自分の「気になったポイント」を話し、他者の「気になったポイント」を聞くという対話の中から、作品のオモシロさや背景を探っていきました。

来場者数  
**582**名  
作家数：20名  
・県内作家2名  
・県外作家18名



### アール・ブリュット in 上越4によせて

誰にも言われたわけでもなく周囲の理解は後回し。  
ただ自分の目的のために、非常識な方法で前人未到の域に足を踏み入れていく。  
そんな冒険者の行為を「パイオニアワーク」と呼ぶことがあります。  
彼らの作品もパイオニアワーク感がいっぱい、初見は驚きや不安が先行しまいがちです。  
「わからない」ことはたくさんあります。  
ただ、それを貫くものは人間としての純粋で原初的な欲求で、  
生の謳歌につながる誰でも分かち合えるものです。  
じっくり眺め、視線を変えることで、  
人間らしい感情の変化「驚き」「笑い」「感動」「好奇」を作品から感じ取った時、  
それまで持っていた認識や常識が大転換するにちがいありません。  
(展示会パンフレットより一部抜粋)

会場ディレクター 米田昌功  
富山県障害者芸術活動支援センター ばーと◎とやま



来場者数  
**1422**名  
作家数：  
個人・施設  
あわせて20組



企画展

もちより作品展示

## マイプレイステーション 私の遊び場

期間：10月6日～12日 10：00～15：30  
会場：リブレリアホール

**障害や世代を超えて集ったみんなの居場所**

アール・ブリュット in 上越4と同時に持ち寄り展示を高田商店街にあるリブレリアホールで行いました。施設や家庭、学校などで行われている「遊び」をテーマに、当事者や家族、施設職員が作品を持ち寄り自分たちで展示しました。来場者は作品を手にとって遊んだり鑑賞しました。また会場内には、誰もが自由に絵を描いたりできる創作スペースも用意。周辺で行われていた地域イベントとの相乗効果で小さな子供連れの家族も多く、世代や障害のあるなしを超えてにぎわう遊び場となりました。

**マイプレイステーションの遊び方**

ここに、たくさんの遊びを集めました。

カルタやスゴクのように、私たちが知っている遊びもあれば、紙吹雪の中に自分の名前を書いて、パッと撒いてから名前を探すというような、私たちの知らない遊びもあります。

どんな遊びも遊び方がわからないと、なかなか楽しめません。

説明書を読むだけではなく、遊び方は遊びながら覚えていくのが一番です。

わからないままに、ちょっとまずやってみませんか。





芸術体験

# 創作の場

みんなであいわい  
あーとなじかん

## 趣旨と目的

平成29年30年度と参加型展示会を通して、福祉とアートに関わる人たちのコミュニティづくりを行ってきました。その中で参加者から展示するだけでなく、創作ができる時間が欲しいとの声が開こえてきました。障害の有無を問わず、定期的に創作を通して集まる場をつくることで、当事者にとっての居場所が生まれること。支援者にとっての相談窓口や情報交換の時間にもなること。町の人たちと障害ある人との関わりにもなること。それぞれの狙いから今年度新たなプロジェクトとして創作の場を5回実施しました。

## プロジェクトの展開と効果

### ◎一般層へのアプローチ

展示会が行なわれている期間に創作の場を実施した際には、子供を中心に多くの人が障害のある人と一緒に過ごす時間を共有できた。コミュニケーションを不得意とする当事者の参加者にとっては、作ったものについて話すことや、つくることを通して言葉ではない関わり方が行えて過ごしやすいこととの声も聞かれた。その一方で、展示会以外の回は一般の方が参加することはほとんどなかった。より参加しやすい形をいかにしてくれるかが課題となった。

### ◎居場所／コミュニティの形成

5回の創作の場を通して、これまでの参加者同士の交流がより盛んに行われた。ここで知り合った参加者同士がフェイスブックやインスタグラムといったSNS上でも、互いにコメントし合うなど、日常的な交流にもつながった。また、展示会が行われる会場で事前に創作の場を行ったことにより、展示会に向けての具体的な相談の場として機能した。また、創作の場で実際に作ったものをそのまま展示するなどにつながった。

その一方で、新規の参加者が増えなかった。余暇活動に対する支援のニーズは高いが、創作活動に関心がある人は多くはないという状況が、はっきりと見えてきた。創作の場という名前の基でつくることだけが行われる場ではなく、居場所として過ごせる機能、例えば、つくっても良いし、作らなくても良い、ただただお茶を飲みに来れるような、より間口の広い場に変えていくことが必要だと考えられる。

## プロジェクトの内容

創作の場における画材や道具は、数種類の紙やペンを用意したが、基本的には各自で持ってきてもらう形をとった。1回のみ「射的の的を作ろう」とのテーマを決めて、こちらからプログラムを提案したが、そのほかの回は各自が作りたいものを、おのおので作ってもらうという形をとった。

6/30	30名
9/8	19名
10/6 ~12	80名
12/9	3名
2/23	14名



平成 30 年 11 月 10 日(土)～18 日(日)

会場：富山県民会館分館 薬商の館 金岡邸  
新川神社 参集殿

主催：富山県障害者芸術活動支援センター ぱーと◎とやま  
共催：東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター

## ブロック展示会として

今回の展示会はブロック内の支援センター担当者や関係者の展示の研修の場として5県8名の方が参加し、金岡邸と新川神社の2会場に分かれ展示を行いました。新潟会場の巡回という形で作品の一部を入れ替えつつ展示什器をそのまま使うことで準備までの時間やコストを抑えることができました。また主催者であるぱーと◎とやま米田代表が新潟会場と同様にディレクターを務めたことにより、より展示した作品の理解が進みました。展示作業自体が今回

はじめての方もおられ基本的な展示技術を学びながら作業を進めました。

## 開拓し、種をまき、育て、つなぐ

特定非営利法人障害者アート支援工房 COCOP ELLI (ココペリ) では、平成30年度より富山県の補助を受け富山県障害者芸術活動支援センターはぱーと◎とやまを開設しました。ココペリは、障害のある方の創作活動を通じて既存の枠組みを超えた表現活動への理解や共生的な環境が大きく広がる可能

性を感じ数多くの取り組みをしてきました。その活動は富山県内で大きく広がり、作品や作家の生き方が観る人に大きな感動を与えると共に様々なジャンルの境界を越えて人と人を結び付ける力をもっていることを実証しています。今回、7県から作品を集められたのもココペリのこれまでの取り組みが実を結んでいます。「創る人も支える人も、アートを味わい、互いに関わる中でそれぞれの光を見つけ、共に豊かになっていく」。支援センターができたことによってよりさらに活動が広がっています。

## HEARTの中にARTがある

米田代表は「HEART」というスベルに「ART」が含まれていることに気づきました。心の中に芸術は宿ると。作家だけでなく、彼らに関わる方や地域の心もあります。その心がどのように作用して作品が創作されていったか。今回の展示では、作品の魅力だけでなく様々な関係性を浮き彫りにしていくことを目的にしました。展示の舞台は、美しく手入れされた庭園、歴史を感じる屋内、荘厳な空間が広がる神社など。いつもとは違う姿、もしくは本来の作品の力を広く伝えることができるかもしれない。ジャンルを超えた生の芸術。富山県・愛知県・岐阜県・石川県・福井県・長野県・新潟県の7県22名の作品が展示されました。

作品のほとんどは米田代表が直接現地に足を運び集荷しました。作品の情報がある程度知っていても、実際に作家本人や関わっている方に会って作品を楽しむことが米田代表のポリシーです。

絵画や立体作品、素材も紙や木材、粘土にセロハンテープ、レシート大の大きさから30mの巻物まで……多種多様な作品一つひとつを丁寧に展示していただきました。カラーコピーで作られた井口直人さんの作品の近くには、自身の顔をコピー機に押し当てて印刷している様子を写した映像が投影され、ムラタクンのロボットの後ろには、フリーハンドで描かれた部品の設計図が、より作家や創作環境が作品とつながる空間ができました。

## 美術家・木下晋氏によるトークショー

展示2日目には、木下晋氏によるトークショーがありました。木下氏はもともと油絵作家であり、油絵のプロセスを応用して鉛筆画を始めました。22段階ある鉛筆の規格を駆使し、濃淡を生かした絵を描かれています。これまでハンセン病患者、腎女など自分の魂と向き合う方をモチーフにしてきました。絵を描くこと以上にモデルを知りたい、死と生に向き合っている方に惹かれると木下氏は言います。

アール・ブリュットを知ったきっかけは、滋賀県にあるボーダレス・アートミュージアムNOMAでのアール・ブリュット作家との合同企画展でした。木下氏はその時の感想を、「仰天した。間違いなく負けた。かなわない」と一言で表しました。絵のこだわりや緻密さ、熱量などどれをとってもこちらと見ている視点がまったく違うのだと。アール・ブリュット作品を見ていると我々凡人こそ不幸だとおっしゃっていました。作家が見ている世界や風景や考えていることを一瞬でもいいから追体験したいと訴えていました。

今回の富山展でも展示してある作品を全て持って帰りたい衝動に駆られたとのこと。トーク中に何度か「こんな話を聞いていないで早く展示を観に行つた方がいい」と笑いを誘っていました。

## 展示に予定外はつきもの？

順調に進んだように見えた展示作業でしたが、後日米田代表よりトラブル続きだったとお聞きしました。まずは、配送トラックがいきなり事故を起こしてしまつたこと。幸い作品には被害はありませんでした(展示会場には少々……)。もう一つは、ぱーと◎とやまスタッフの井上さんが体調不良により作業に加われなかつたこと。指示出しや事務用品の整理など展示の主要メンバーとして想定していた井上さんが関われなくなり焦つたそうです。確かに展示当日は米田代表は2会場を何度も往復していましたが、それでも素敵な展示になったのはやはりこれでココペリが積み上げてきたノウハウとネットワークが生きていたからです。足りない什器を他のもので代用したり、他の方法で展示を試してみたり。何よりボランティアの力が大きかったです。中には米田代表に今日初めて会つたという方もおられました。つながりがつながりを生む仕組みが富山県で生まれつつあります。



来場者数

996 名

金岡邸 608 名  
参集殿 388 名

## あしたの星☆2

Smile

平成30年7月14日(土)  
会場：新潟市北区文化会館  
出演数 14組



## 想像以上の反響

何か面白いことをやってみよう。そんな感じで昨年度やってみたパフォーマー公開オーディション『あしたの星☆』。その後、全国的に類似した催し物(あしたの星☆自体が雑多な音楽の祭典 スタ☆タン!!を模倣していることを添えさせていただきました)が開催されるなど大きな反響がありました。2回目を開催することも決まっていよいよ、出場したいという問い合わせもあり今年度の方向性をどうするか協議を行いました。

## バージョンアップ

集まったメンバーはラ・LaLa Factor Yの高井代表、アートキャンプ新潟の近代表と職員の本間さん。ちなみにアートキャンプ新潟は平成30年度より障害者芸術文化活動普及支援事業を新潟県より受託しています。やりとりは次のとおり。

**坂野** 2回目、どうしますかね。開催が決定していないのにこの日のためにと新曲が送られてきましたよ。近 うちにも3組ぐらい出場したいと問い合わせがあったよ。何言っているかよく聞き取れなかったけど。高井 みなさん、自分を表現する場を求めているんですね。基本的にやった方が良いと思うけど。近 やった時は面白かったんだけど、冷静に考えると結構エネルギーを使うイベントなんだよね。ちゃんと

## 受付開始

昨年の状況からとてもユニークな問い合わせがくるのではと覚悟していました。そして予想通りきました。自分の道を突き進みます」「ピキニで出ようか迷っています。やっぱ夏です」「生い立ちを話してリスナーの心に爪痕を残しますよ」「母親への思いを伝えます」「昨年のリベンジを果たします」「テキサス・ハリケーン!」

迷った挙句、14組のパフォーマーが舞台上立つことになりました。

## オーディション

幕を開けると、観客少なくなっ!近さん曰く、「ごめん、正直にいます。動いていません(笑)」。

昨年の演目に朗読とジャグリングが加わりさらにパフォーマンスの幅が広がりました。途中、審査員がパフォーマーから「あんた、明日にでもお母さんに電話をしてあげなさい。話せるうちに話しておかないと後悔するわよ」と説教を受ける一幕も。本間さんのヨーヨーは見事にTシャツに絡まりまくり、昨年度も女装枠で登場した恋路姫之丞さんは着物を新調していました。中でも一際目立ったのがひと夏の恋を表現したYOHKOさん。文句なしのカオス賞に選ばれました。

見事グランプリを獲得したのはオリジナルの太鼓を披露した栗林瑠昌さん。最年少での受賞となりました。昨年度は、踊りを披露する予定が舞台上が

役割分担をしましょう。

**坂野** では、実施する方向で。やるからには本気でやりましょう。昨年度は厚生労働白書にも取り組みが紹介されましたからね。私は問い合わせ窓口とチラシ作りをします。

**高井** 昨年度やってみて、誘導などパフォーマーに対するフォローが不十分だったと思います。坂野さん、しっかりサポーターを養成しませんか?

**坂野** はい。やりませう。  
近 じゃ、俺は広報で。  
本間 僕は、出演者の立場で頑張りますよ。出演してみないとパフォーマーの気持ちが分からないと思うんですよ。

近・高井・坂野 . . . . .

こうして高井代表と私はサポーター養成の企画、近さんは営業、本間さんは自宅近くの公園でヨーヨーの練習とあしたの星☆2の開催に向けてそれぞれ動きだしました。

## 舞台芸術サポーター養成研修会の挫折

早速、パフォーマーをフォローする人材を育成するために舞台芸術サポーター養成研修会を企画しました。全6回コースで障害特性の基本的な理解から、ステージ裏の音響や照明の基本的な知識を学べるプログラムを組みました。しかし、待っても待っても受講申し込みが届かず。大学やボランティアセンターを中心に広報を行いました結果一人も申し込みがありませんでした。舞台芸術という名称がまだまだ一般的には敷居が高いのかなと。プログラムの回数などももう少し気軽に参加できる内容にすれば良かったと反省しました。

った瞬間に前を向くのが恥ずかしくなってしまう開始後ろを向いたまま演技切り、舞台袖まで一度も前を向かなかったという離れ業をやったのですが、今回は堂々と迫力ある太鼓を披露してくれました。グランプリのトロフィーを授与した瞬間に、審査員に投げキッス。他のパフォーマーもつられ投げキッス合戦になり、取捨がつかなくなったためそのまま幕をおろしました。

## オーディションを終えて

今回もなんとも言えない空気に包まれた1日でした。未だにこの雰囲気を感じたりやすく言葉にすることができません。面白いも楽しいもしくりこないし、ふざけているわけでもないし。近いものとしては予測不能・未知なる出来事でしょうか。中毒性があることは間違いないです。この分からないことを大事に新潟県の恒例イベントにしていきたいです。

また昨年に引き続き出演したいという声も多く、まだまだ自分を舞台で表現できる機会が足りていないのかなと。オーディション終了後に会場外で誰も帰ろうとせず、お互いを称え合っている姿が印象的でした。会場内より大勢いたんじゃないかな。

## その後

あしたの星☆2終了後に詰め切れず再度舞台芸術サポーター養成研修会を企画しました。2日間コースに短縮し、周知をしたところ人数こそ少ないですが6名の方が受講しました。うち2名はあしたの星☆2のパフォーマーで、今後は支える側にまわってみたいということでした。次年度は裏方として動いてくれるかもしれません。



来場者数  
150名





2019年2月16日（土）に福井県において少人数制の展示研修会を開催しました。企画者はNPO法人福井芸術・文化フォーラムの荒川さん。プログラムのマネジメントに徹する荒川さんのまわりにはいつもたくさんの方がいます。荒川さんというフィルターを通して、物事が整理されたり点と点が結ばれたりたまに「あいだ」にいる人。

今回の研修会の講師は、富山県障害者芸術活動支援センターはーと◎とやまの米田代表と、デザインオフィスI DE K Oの小出代表。すっかりお二人での研修が定着しました。今回、荒川さんが加わったことで、アート×デザイン×マネジメントと最強のユニットが誕生しました。

荒川 裕子（NPO法人福井芸術・文化フォーラム）

米田 昌功（はーと◎とやま代表）

小出 真吾（I DE K O代表）

坂 野健一郎（東海北陸ラフォーラン障害者芸術文化活動広域支援センター）

かつ井とうちあわせ

米田 ヨーロッパ軒。新潟のタレかつ井はここから派生している気がする。

荒川 カツが薄いのが福井のソースかつ井の特徴ですね。ヨーロッパ軒本店は週末は並んでいるので出前が一番ですよ。



小出 ちそうさまでした。本当に美味しかったです。新潟のかつも薄いところが多いですよ。味は全然違いますね。

坂 私は卵とじのかつ井が苦手。特にたまねぎが。なのでヨーロッパ軒のかつ井は最高です。米田 によりたくあんがビニールに包まれて出てきたのが感動。写真を撮っておくべきだった。

坂 米田先生、やっぱり気になる視点の違いですね。今日の研修会もよろしくお願います。

米田 今回、展示について初めて学ばれる方が多いと聞いていたので手ごろに展示に使えるアイテムを100均などでいくつか揃えてきました。

小出 私も100均をまわってみました。よく見渡してみると凄いですね。結構、なんでもそろっちゃう。このA4の額も100均ですよ。

荒川 まず皆さんに100均で色んなものが手に入るということを知ってもらいましょう（笑）。多分ですが、展示という言葉自体に額装しなければいけないなど敷居の高さを感じている方が多いと思います。

坂 無理なく参加者の方が作品を楽しんだり、作者へのリスペクトを感じていただける時間になるといいですね。荒川さんは、これまでも様々な立場の方をゲストとして招いて、不特定の方のコミュニティを作ったり大学と福祉施設をつなぐ取り組みをしています。そうした取り組みをなぜ実施しているのか、今回の研修の企画に至った経緯もあわせて教えてください。

荒川 私の所属は文化系の団体です。ただ文化ってそもそも人との関係の中で成熟していくので、個人的にはもっと様々な方や団体と関わっていきたくと思っています。その一つが、福祉施設。文化系の団体にとって遠い存在だったのですが、アートプロジェクトを通して、何度か交流の機会を設けることができました。施設に通って、担当の人とお話する

中で「知ってもらおう」ことそのものが、社会参加なんだって気づきました。世間話程度でもいいので、こうやってお互いが学んだり話したりする場が、社会には本当に必要されているんだと肌で感じているところです。

培う・カタチにしておく

米田 私もポジシヨン的には似たようなところかも。だからかなり前から荒川さんのことは知っていましたよ。

荒川 福井県内には米田さんのファンがたくさんいます（笑）。

米田 なんかこの場に4人がいることって、ブロックセンターとか制度とかネットワークとはまた別次元の話のような気もするんです。この4人が福井県にいる理由って普通に考えたらほとんどない訳じゃないですか。でも、なぜかわいらい研修の企画をしている。もつと長い時間軸の中で4人が揃う土壌があったんじゃないかと。ブロックができました、では4人で集まりましょう、ポンとはいかないですよ。うまく言葉にはできないのですが、あえて当てはめるのであれば「培う」でしょうか。

小出 「培う」。アート活動や福祉に必要とされているワードな気がします。ゆっくりとかゆったりといった感覚がどんどん薄れているような。つながる土壌を作っていくために僕も場はとても大事だと思います。ただ一緒にいる



だけでも解決したり次につながったりすることは多いのですが、意図的に作るのって難しいですか？

坂 難しいですね。私はわざとらしさが際立つのでだいたい失敗します（笑）。加えて、いきなり場を設けますといっても培っていないです。続けていくしかないですね。荒川さんは後ろの方でしっかり考えてカタチにしますよね。まとめたり、整理したり、つなげたりというマネジメント力が凄いなと思います。荒川さんに相談すると大体、企画に深みが増していきます。3月のブロック実践報告会も素晴らしいご提案をありがとうございました。

荒：折角の機会ですので福井県が誇るパフォーマンズや、学生との福祉施設のアートプロジェクトはぜひ紹介したかった。実践している人たちの声はもっと多くの方に届けたいと思っています。

米：なかなかその部分をまとめられる人がいないんですよ。やりたい気持ち強い方は多いけど。小出さんもアーティストと関わる中で苦労も多いんじゃない(笑)。

小：僕自身もアーティストなのですが、アーティストの考えていることをカタチにしていくな仕事が増えています(笑)。本当に大変ですね。綺麗にまとまった状態でくることはほとんどありません。間に入ってくれる方がいると仕事の質もスピード感も全然違いますね。

坂：展示会の場合、会場との調整なども重要ですよ。我々はブロック展の新潟会場で会場と信頼関係が築けずちょっとしたトラブルを起こしてしまいました。

小：関わっていたプロジェクトで、主催者と会場側がどんどん仲が悪くなっていったって、なぜかデザイナーである私が仲介役をするような変な関係になったことがあります(笑)。

米：やはり後ろで支えて、思いを形にしていけるのは大事ですね。

坂：新潟の支援センターのインタビューでも、間に入る方がいいという話が出ました。荒川さんは、貴重な存在です。

のタイマンなんであまり選択肢がない。でもIIから仲間が出て来て、その分敵も徒党を組んで向かってきたり。IIIになったら仲間の職業も選べるようになって自由度が増えました。ゲームの世界ですが戦略など世界が広がった気がします。

小：世代ですね(笑)。人と関わることで、こちらの引き出しは確実に増えていきます。

荒：あの：坂野さんから聞いていると思います。が、来年度福井県で展示会を開催したいと思っけていて。ついでに、米田さん、小出さんのバリエーションに加えてもらえないかと。

米：いつ頃をご予定？

荒：11月の後半から、12月の中旬ぐらいでできればと。文化フォーラムでも同時期に舞台系のプログラムを実施して、ボリュームのあるアートプロジェクトにできたらと思っています。

小：福井県からもアーティストがどんどん出てきていますからね。

米：富山県でも、11月頃に展示会を開催する予定です。想定する展示のテーマや作家によっては、巡回展という形もとれるけど、作品や展示仕様の輸送など早急に調整が必要かも。

坂：実は、新潟県で次年度全国障害者芸術・文化祭という大きな大会があります。プログラムの一つに展示会があります。開催時期は時期は9月～11月ですね。場合によっては、今

荒：いやいや(笑)。ただ文化芸術活動が持つつなぐ力は凄いですよ。とても広いジャンルで福祉と似ているところがあります。幅の広い活動同士がつながるとさらに可能性が広がります。地域づくりには外せないファクターですね。ただ、残念なのが行政的な財政の問題になると、真っ先に削られるのが文化芸術と国際交流の予算と言われています。

米：文化芸術活動によって、交流人口が増えることによって生きがいづくりや楽しさの共有など目に見えない効果もいっぱいあるのにな。これからは、コトづくりの時代だと言われているのに残念です。

小：クリエイターが一人でも出ると地域の姿は変わりますよ。クリエイター同士がつながると更に面白いプロジェクトが生まれることもあります。

### そして、つながりへ

荒：目に見えにくいことですが、しっかりと着実に取り組みを続けていくことで少しずつ地域は変わってきます。活動を継続することはとても大変ですが、最も重要なことだと思っています。文化芸術関係の予算は単年度のものが多いのですが、それでも中長期的な視点で事業のストーリーを描いていくことが大切ですね。

坂：私もすぐ目の前のことをこなすことに力を入れてしまいます。少しスケールは小さいかも

年度と同じように新潟から始まる巡回もできるかもしれません。

小：新潟―富山―福井。その後も続きますかね。

坂：そういうえば、別件で小出さんには静岡県から研修講師の依頼が来ていました。

米：福井県では3月にもブロック報告会があるじゃないですか。あの内容で、そのまま富山県で実施したいんですね。できれば6月～7月ぐらいで。短縮して1日コースでもいいかも。

坂：あれがやりたい、これがやりたいという声が増えてくるのは嬉しいですね。引き続きブロック事業に携われるよう頑張ります(笑)。

しれませんが、そういった意味では今日も皆さんがつながったことによって研修という形になっていますよ。

米：しかも大して打合せしなくてもできちゃう(笑)。

小：いやいや、僕なんかはとても緊張していますよ。

米：大丈夫でしょ。なんか新たなスライドも用意しているみたいで楽しみにしています。

小：まいったな。ただこうして展示会や発表の場数を踏むことによって、伝えられることのバリエーションは増えていくと思うんです。ブロック内の関係者が場数を踏めば、もっと外の世界に対してやれることが増えていく気がします。

坂：個人的には荒川さんの話も聞いてみたいんですよ。さっきも少し話をしましたが企画を立ててカタチにしていくプロセスやマネタイズの部分だったり。また、そのプロセスにどのような方が関わっているのかなど私も裏方の人間なのでぜひ聞いてみたい。

米：もう研修のユニットを組んじやばいいんじゃないの(笑)。このチームでブロックを回ったり。行った先で講師が増えていって、回るたびにユニットが拡大していくと面白いと思います。

坂：某RPGみたいですね。勇者は誰でしょうか。でもあのゲームってIの時は勇者一人で旅に出たじゃないですか。基本的にモンスターと

荒：展示会はまだ実現できるかは分かりませんが、研修終了後に会場の候補を見ていただければと。

坂：既に会場を選定しているところが。さすが荒川さんです。

荒：大工仕事ができる方も見つけています(笑)。その前に、そろそろ研修の準備をしないとですね。

米：早速ですが、パワーポイントがリリースしました。





昨年度に開所した、あいちアール・ブリュットネットワークセンター（通称AANC）。2年目となる今年度の事業では、昨年度の企画展「あいち・まちじゅうアール・ブリュット、そのv o i 2」が開催されました。昨年は愛知県内の旅館や銀行などのお店を舞台として行われましたが、今回は知多市岡田地区の古民家を会場として開催。福祉関係者だけではなく、地域の人も巻き込んで実施された展示会の開催までの経緯をお聞きました。



大：大乗裕美子

（あいちアール・ブリュットネットワークセンター事務局兼事業担当）  
角：角地智史（東海・北陸プロダクティブ読書者芸術文化活動広域支援センター）

**展示会と一緒につくる、巻き込み方**

角：「あいち・まちじゅうアール・ブリュット v o i 2」生きるよろこび展。この間はゆつくりと街中での展示を拝見させていただきました。まず昨年と比べてずいぶん作品数が増えましたね。今回作品はどのように集めたのですか？

大：今回の展示会ではアートディレクターの伊藤が中心となって県内500の事業所にアンケート

ート調査を行い、展示会に興味のあると答えられた事業所さんに、アポイントを行って施設に出向き展示会に誘いました。そこでさらに興味のある方には、グループラインに入ってもらい、その人たちは逃さないよ（笑）

大：展示会に向けて度々集まるのは難しいので、そのあとは基本的にSNSを通してのやりとりでした。

角：展示作業についてはどのように行ったのですか？

大：実行委員に入っていたいた福祉事業所さんや個人に協力してもらって、一緒に展示を行いました。昨年はサポートセンターの私たちが中心で展示作業を行っていたので、とても助かりました。キャプションを作ってもらったりとかも。

角：出品したい事業所さんが自分たちで展示を行うという形は、無理なく続けていく上でとても大切ですよ。

**まちのコミュニティを育てている人**

角：今回は知多市岡田地区が舞台ですが、どのような経緯だったのですか？

大：もともとセンター長とのつながりで、岡田に範文亭というお店をやられている新美さん

という人がいるんですけど。その方は町おこしとしてイベントを仕掛けていたりもする方で。岡田地区で昔あった「岡田カツ井」を復活させたい、という全く別の相談からセンター長が岡田の地域を見に行くことになり、そこで岡田の街並みと風情の良さにびっくりして。

角：カツ井からきっかけが始まったのですね。

大：はい、そこで話をする中で古民家がいくつかあるけどその活用方法にいろいろ苦戦しているという話が出てきて、じゃあ今度障がいのある方の展示会をするときに、岡田も候補にいれよう。

角：カツ井からアール・ブリュットへ。候補の中からこの地区でやろうという決め手は何だったのですか？

大：一番決め手だったのが、コミュニティがしっかりしている。新美さんが、若者も巻き込んで率先して町づくりのことを頑張っていたり、地域のお年寄りに町案内のボランティアガイド、そういう人たちとのつながりをつくっていたりとか。もうとにかく地域のことに対して、すごい顔がきいていて、地域の方も新美さんの言うことだったから、という関係というか。そういう土台があったのでこの地区に決めました。

角：そういった町づくりのキーになる方がいらっしやったというのが大きいんですね。町の中心のひとつの会場だけじゃなくて、あちこちの会場が開いたのも。

大：そうですね、新美さんがいたおかげですね。

**小学生がガイドしてくれる展示会**

角：展示会当日は町の方がスタッフピブスや岡田のTシャツを着て会場に立っていたりと、自主的に集まって関わる人の数がぐんと増えたかなってというのが印象的でした。それから、もう一つ印象的だったのが、小学生のボランティアガイドだったんですけど、その経緯なんかも少し聞かせてもらえたらな、と。

大：やはり新美さんが岡田小学校ともつながっていて、その小学校の校長先生はいろいろ町のことを熱心にされている、という話を聞いたので、一緒に活動できるかなってという想定がありました。実際行ってみたら、いいよーつと。

角：あっさり。

大：そのあとに4、5年生の子どもの前で少し時間をもらって、こういうボランティア興味のある人と聞いたところ、ほとんど全員が手を挙げてくれたっていう感じだったんですけど。

角：驚きますね。授業の一環ではなく、ボランティアとして。なぜそんな積極的だったのでしょうか。

大：校長先生から子供達に前もって、ボランティアの意義だったりとか町を大事にする思いだったりとか話をしてくれたのだと思います。その後押しがあつて、やろうという感じになったのだと思うんです。



角：小学生のガイド、僕もたつぷりガイドしてもらったんですがとても良い時間でした。小学生にどの作品が気になる？なんで？とか聞きながら一緒に見るそのやりとりが楽しくて。それから一緒に街を歩く中で普段の遊び場や心霊スポットなんかも教えてもらいました。

大：あく小学生からすごい時間かかった人がいたと聞きましたが、角地さんだったんですね！

角：最後の方は、ヘトヘトになっていたかもしれない。

## 一緒につくることでの責任

角…逆にいろんな人を巻き込んだからこそ、生まれてきた困りごとってあったりしましたか。

大…今回新美さんっていう人がいたからなんとかなったんですけど、もしいなかったと考えるとすごい問題が出てきたなと思っていて。自分たちのセンターは会場から離れているので、常に会場の様子だったりとか見えていないのがあったりします。自分達に非があるのでその認識が、地域の関係者によって違っていたりして、「○○さんは良いと言っていた」のような形で、曖昧なまま、展示作業を開始してしまったり。後から、「その件は△△さんが管理しているから、ちゃんと△△さんに確認しなきゃダメだよ」と怒られてしまったり。

角…それは大変ですね。

大…駐車禁止のところに停めちゃったとか、そういうのも対応が遅くなっちゃって。結果的に色々な方に迷惑をかけてしまった所もありますが、自分たちの至らなさはもちろんですが、規模が大きく遠方で全てを把握する事も難しかったので、できればその地域で、核になって動ける人、ある程度責任をもち、すぐに対応できるサブリーダーのような人を、明らかにしておけたらよかったです。角…よりしっかりした実行委員会なりの形をとって、イベントを行っていった方がよいという

ことですね。

大…今回、名古屋で行った舞台のフェスティバルの時もそうだったんですけど、実行委員は作ったんですね、なんとなく。けれど実行委員長をたてなかったの、「この件は誰に確認すればいいんだ？」という事が多く、舵が取れていなかった。大いに反省が残ります。

角…今の声のトーン、すごく大変そうなトーンでした。集められた方々は声かけた人が中心でしょ、という気持ちで集まっていたりしますもんね。

大…もちろん、主催が自分達なので責任は自分達にあります。ですが、それでは、やれる範囲に限られてしまうのも事実です。なので、三年目からは、手を挙げてくれたところに予算をつけてやっていこうという話をしてます。地域で活動していきたい、展示会とかやりたいよ、手を挙げてくれたところにお金をつけて、小さい活動を各地域でやってもらうっていう形で。そのサポート、中間支援的にアドバイザー派遣したり、フォローアップの方をやっていこうという話をしてます。

## まず、やって見せたことでの広がり

角…話は展覧会に戻りますが、逆に地域の人を巻き込んだからこそで、よかったこととか何か喜びみたいなことは何かありましたか？

大…まあ、地域の人も最初は半信半疑でアール・ブリュットもどういふものかもよく分からな

いし、展示するにあたってお家の物とかも片づけさせてもらったりしたので、心配の目で見られていたと思うんですけど、実際こう飾られて、ばーってこう見て喜んでくださって、「素敵だね」って家のオーナーさんも喜んでくれて。さらに普段は空き家の場所にくさんお客さんが来て、楽しんでくれるっていうのが地域の人のとってもすごい嬉しいことだったよ。地域の人が感謝をされたときにやってよかったな、っていうのを思いました。

角…終わったあとの地域の人の明るい反応、素直に嬉しいですね。

大…岡田の人の気持ちとしては、アートでこれだけ人が呼べると思わなかったっていうのが正直なところ。これだけやれるんだったら町おこしになるから、また来年もやってよ、みたいな感じで。さらに、それを受けて自分たちは違う知多の団体さんと、生きるよるこび展、引き継いでやりたいっていう団体さんが出てきたりして、すごいいい動きができてるなって思います。

角…じゃあ来年ももしかしたら形が変わって、地元

大…そうですね可能性がある動きが始まっています。角…それはまさにサポートセンターの役割がひとつ果たせたというか、地域に広がっていく風景が見えました。明るい話で終われて良かったです！ありがとうございました。

## 県域センター開所半年を振り返って

話し手 堤鉄博（岐阜県障がい者芸術文化支援センター）

県域センターとして7月に開所した『岐阜県障がい者芸術文化支援センター』。tomomiアールサポートセンター（通称TASCぎふ）として、オープンアトリエ事業を核に、ネットワーキング、人材育成など精力的に活動しています。インタビューに伺ったのは、オープンアトリエが開かれていた1月17日。オープンアトリエを見学しながら、『TASCぎふ』の初年度の挑戦と今後の展望についてお聞きしました。

堤…堤鉄博（tomomiアールサポートセンター）

菅…菅井豊子（東海・北陸ブロック障がい者芸術文化支援センター）

角…角地智史（東海・北陸ブロック障がい者芸術文化支援センター）

## 「オープンアトリエ」の存在

菅…オープンアトリエにたくさんの方がいらっしやっていますね。

堤…今日は市内の団体の方が参加されていますので、特に多いかもしれないですね。

菅…机も足りないくらいですね。

堤…ほんとですね。急ぎよ2台追加しました（笑）。菅…開所されて約半年経ちましたが、この半年はどんな感じでしたか？

堤…7月に開所して、岐阜県をはじめいろんなところで宣伝してもらって、『TASCぎふ』がここにできたよ！ってことを少しずつ知っ

てもらえて、オープンアトリエも1回のペースでやって、参加者も多くなってきて、いろんな方に知っていただけて半年を迎えているかなと思います。

菅…リーフレットにはオープンアトリエを核にして事業を展開していく図も入っていますね。

堤…コンセプトを考えた時に、この場所を使ってみなさんが集う場所にして、そこに集まった人のネットワークができて、そこから広がっていったらいいということで、まさにこのリーフレットにあるようにスタートしたっていうところですね。

菅…県域センターの拠点にアトリエのスペースがあるって非常にいいな、羨ましいなと思います。オープンアトリエは今日で何回目ですか？

堤…1月で7回目ですね。今年度は試験期間として、曜日を変えてみようとか、時間帯も午前に行ったり午後に行ったりとか、データを集める意味でもいろいろやってみよう！ということでもスタートしたんですけど、中身については議論がありました。やっぱりワークショップみたいなして講師を呼んでやるほうが参加者にとっては来やすいんじゃないかという議論もありましたが、回を重ねてやっぱり自由にできるスペースってあるようになかなか





無いので、今のスタイルで自由に創作する場を提供して、いつ来ていただいてもいいし、いつ帰っていただいてもいいというふうな、ゆったりした空間をつくり出すということを目指してもいいのかな？と、段々確信に変わってきてるところもありますね。

菅：チャレンジの年の中で見えてきたものとか、来年にいかせそうなものがあるんですね。

堤：そうですね、見えてきてますね。

菅：曜日もいろいろな日を設定してるそうですね、時間帯もいろいろだったんですか？

堤：いろいろですね。土日は午後の時間帯で設定しましたが、土日だとご家族で参加ということもありますし、逆に土日だと施設や学校関係だと参加しにくいということもあって、今日は平日で、施設の方がまとめて来て下さるなんてこともありますので、曜日によって参加する方も当然違ってきますね。来年度についても曜日も固定せずと思ってますね。

菅：時間帯も4時間くらいですか？

堤：基本的にそうですね。ずっと作業されるって方もいらっしやらないわけではないですが、途中休憩したりとか、お話をしたりとか、そういう時間もありますので、午前午後の4時間くらいがいいかなと思ってます。

菅：アトリエに入って驚いたんですが広いですね。

堤：会議室にすると60人入りますので。

菅：アトリエの壁に紙が貼ってあってそこに描いてたり、あとびっくりしたのが、ガラスに描いてる！と思っただんですがあれは？

堤：11月の養成研修をやった際に参加者の方から「せっかくこんな大きなガラスがあるんだから、そこを活用できるようにしてはどうか？」とアイデアをもらって、それをやってみよう！ということ。

菅：参加者の声を形にしたってことですね

堤：もう、我々もそれを大事にしたかった！

菅：研修会でも参加者の方が意見を言ったり、活発な話し合いがされてるんですか？

堤：11月の最初の養成研修は、自分たちでオープンアトリエを準備するところから始めて、みんなの意見を集めて、みんなで作り上げていきましょよ！という提案をしたらいろいろな意見やアイデアを出してくださって助かります。

菅：皆さんで作り上げていくって感じいいですね！障害ある方々を支えるサポーターの方もたくさんいらっしやるってお聞きしたんですが？

堤：障害のある方とかアートを遠巻きに見るんじゃないって、皆さんに当事者になってもらいたい！って思ういがあるんです。そこで創作活動する参加者の方ももちろんですけど、それをサポートする方も遠巻きじゃなくて自分

菅：養生シートがびっしり敷いてあって（笑）

堤：（笑）。最初は小さい養生シートをベタベタたくさん貼ってたんですけど、職員がこれじゃ時間もかかるからって、大きい養生シート1枚買って、それで今はかなり準備時間が短縮されています。

菅：あと、あの画材の多さ、びっくりしました！あれだけ机の上に並んでいると来た方がウキウキするだろうなと思って。

堤：紙とか画材とか自由に使っていていいですよっていうと、ホントに今、菅井さんが言われたように、みんな「えーっ!! 使っているの!!」って、表情見たらわかりますよね。わあどこれにしよう!! って選ぶ楽しさみたいなものがあるって。

菅：ありますね！

堤：参加した方のテンションを上げる仕掛けかなあと思ってます。

菅：オープンアトリエにしかないような画材とか、こだわられているものはありますか？

堤：やっぱり大っきな紙ですね。今日は壁面に口の段ボール用紙を貼ってましたし、下にも口紙で長い紙とか。せっかくこういう場所に来たんだから、家とか学校ではできないことをやりたいという声があったもんですから、それは大っきい紙だな！と皆で話して。大っきい紙、喜ばれます（笑）。

菅：自分の意見を形にしてくれたことで、また行ってみようと、参加者の方は思いますよね。

堤：それ、ありますね。

菅：我々も手探りでがむしゃらに走り続けてますが、来年度以降の課題としては、アトリエを中心に据える以上は、ここに人が集まらないと何も始まらないので、これが長く継続していくような仕組みづくりをやりたいかなきゃいけないと思ってます。もう一つはサポーターですね。この方々としっかり関係づくりをしながら一緒にやっていきたいという気持ちがあるから強いので、こういう風にサポーターの方に協力してもらおうか、意見をもらうか、参加してもらいながらどう進めていくか？この間、新潟で見せていただいた持ち寄りの作品展、あれなんかはすごくいいな！と。そこにいる方は作品を展示しに来るんだけれども、そうすることで皆さんが当然かわるし作業所の中でも広がるし、ああいったことは参考にして進めていこうかなと思ってます。

菅：養生シートがびっしり敷いてあって（笑）

堤：（笑）。最初は小さい養生シートをベタベタたくさん貼ってたんですけど、職員がこれじゃ時間もかかるからって、大きい養生シート1枚買って、それで今はかなり準備時間が短縮されています。

菅：あと、あの画材の多さ、びっくりしました！あれだけ机の上に並んでいると来た方がウキウキするだろうなと思って。

堤：紙とか画材とか自由に使っていていいですよっていうと、ホントに今、菅井さんが言われたように、みんな「えーっ!! 使っているの!!」って、表情見たらわかりますよね。わあどこれにしよう!! って選ぶ楽しさみたいなものがあるって。

菅：ありますね！

堤：参加した方のテンションを上げる仕掛けかなあと思ってます。

菅：オープンアトリエにしかないような画材とか、こだわられているものはありますか？

堤：やっぱり大っきな紙ですね。今日は壁面に口の段ボール用紙を貼ってましたし、下にも口紙で長い紙とか。せっかくこういう場所に来たんだから、家とか学校ではできないことをやりたいという声があったもんですから、それは大っきい紙だな！と皆で話して。大っきい紙、喜ばれます（笑）。

菅：自分の意見を形にしてくれたことで、また行ってみようと、参加者の方は思いますよね。

堤：それ、ありますね。

菅：我々も手探りでがむしゃらに走り続けてますが、来年度以降の課題としては、アトリエを中心に据える以上は、ここに人が集まらないと何も始まらないので、これが長く継続していくような仕組みづくりをやりたいかなきゃいけないと思ってます。もう一つはサポーターですね。この方々としっかり関係づくりをしながら一緒にやっていきたいという気持ちがあるから強いので、こういう風にサポーターの方に協力してもらおうか、意見をもらうか、参加してもらいながらどう進めていくか？この間、新潟で見せていただいた持ち寄りの作品展、あれなんかはすごくいいな！と。そこにいる方は作品を展示しに来るんだけれども、そうすることで皆さんが当然かわるし作業所の中でも広がるし、ああいったことは参考にして進めていこうかなと思ってます。

菅：養生シートがびっしり敷いてあって（笑）

堤：（笑）。最初は小さい養生シートをベタベタたくさん貼ってたんですけど、職員がこれじゃ時間もかかるからって、大きい養生シート1枚買って、それで今はかなり準備時間が短縮されています。

菅：あと、あの画材の多さ、びっくりしました！あれだけ机の上に並んでいると来た方がウキウキするだろうなと思って。

堤：紙とか画材とか自由に使っていていいですよっていうと、ホントに今、菅井さんが言われたように、みんな「えーっ!! 使っているの!!」って、表情見たらわかりますよね。わあどこれにしよう!! って選ぶ楽しさみたいなものがあるって。

菅：ありますね！

堤：参加した方のテンションを上げる仕掛けかなあと思ってます。

菅：オープンアトリエにしかないような画材とか、こだわられているものはありますか？

堤：やっぱり大っきな紙ですね。今日は壁面に口の段ボール用紙を貼ってましたし、下にも口紙で長い紙とか。せっかくこういう場所に来たんだから、家とか学校ではできないことをやりたいという声があったもんですから、それは大っきい紙だな！と皆で話して。大っきい紙、喜ばれます（笑）。

菅：自分の意見を形にしてくれたことで、また行ってみようと、参加者の方は思いますよね。

堤：それ、ありますね。

菅：我々も手探りでがむしゃらに走り続けてますが、来年度以降の課題としては、アトリエを中心に据える以上は、ここに人が集まらないと何も始まらないので、これが長く継続していくような仕組みづくりをやりたいかなきゃいけないと思ってます。もう一つはサポーターですね。この方々としっかり関係づくりをしながら一緒にやっていきたいという気持ちがあるから強いので、こういう風にサポーターの方に協力してもらおうか、意見をもらうか、参加してもらいながらどう進めていくか？この間、新潟で見せていただいた持ち寄りの作品展、あれなんかはすごくいいな！と。そこにいる方は作品を展示しに来るんだけれども、そうすることで皆さんが当然かわるし作業所の中でも広がるし、ああいったことは参考にして進めていこうかなと思ってます。

菅：アトリエや研修の集客に関しては、チラシを作ったりとかFBで投稿したりとかいろいろやり方があると思うんですが、今年はどうな方法でされてましたか？

堤：まずはリーフレットを作ったってことと、あとはHP、あと県の障害福祉課がサポートしてくれまして、そこに毎回お願いして、県の障害福祉課で会議がある時に、アトリエ開催の紹介をもらったり、そこにチラシを配布したり。あとこの建物の2Fにホールがあって年間30本くらいホール事業やってるんです。その中には障害者がかかわるようなイベントもありますので、そういった時には必ず差し込みでチラシを入れさせてもらってます。それは定期的に続けてやってきましたね。

菅：チラシの作り方などで、これは効果があったというやり方ありましたか？

堤：まだその検証まではいってないところがあるというのが現状ですけども、HPで言いますと、今動画が簡単にUPできたりするので、オープンアトリエの賑わいを写真じゃなくて動画で伝えられることもあるので、そういうことも始めたりしてますけどね。

### 新しい関係性が生まれる場所

角：オープンアトリエに来られてる参加者の層ってどんな層の方ですか？

堤：幅広いと思います。今日は少ないですけど、家族連れだと幼児の方から参加されますし、



つたなあと思いました。

角：来年度以降も広域センターがあれば相談のつたり、県域センターに向けた研修を実施したりってことですかね？

堤：我々でも今後研修を組んでいく中で、広域センターの方を講師としてお呼びして今までの広域センターのノウハウを活用させてもらって……と考えてます。

角：他の団体の事業の在り方とかを調べたり知っ

年配の方もずっと参加されています。

角：さっき見学させていただいたら、個人で来た方、施設で来た方が同じテーブルで作られていましたよね

堤：それがぼくにも不思議で、ホントに自然と交わりながら、毎回来られてる方と今日初めて来た方が同じテーブルを囲んで魚の絵とフクロウの絵を描き合っていて、そこで会話が始まったりとかしてるんです。あと、足で絵を描かれる方がいらつしゃるんですけども、その様子を見ていた男性の方が「ずっと描いてると足が疲れるから、疲れないような道具をワシが考えてやる！」って。そんな方もいらつしゃるんですよ。

角：へえー、すごい！ 作る場所を通して、次の新しい関係性とかが生まれてるのかな？と自分ができることをねえ〜(笑)。

堤：そうなんです。こちらがお願いもしてないのに(笑)。

菅：モチベーションの高さっていうのはすごいですよ

堤：この間も「僕は尺八を吹いているから教えたいんだ」っていうね。まだ実現できてないんですけど、ここにどうやって尺八を絡めるか？

角：ハハハハ(笑)。いいですね、そのスタンスが！

堤：でしょ！でも、そう言うってくださる方が幸いなことにいらつしゃるんで、そういう方が

たりする機会がありますか？

堤：それは実は気になってるんですけど、静岡でも県域センターが立ち上がったけどどんな風になってるんだろう？とか、ブロックエリア以外の県でもいろんな実践をされてますよね。展示会はどういう仕組みでやっているのか？とか、そういうのはすごく興味があつて知りたいですね。

角：他の事例を広域センターとしてはどうやってまとめてお伝えできるかな？って来年度に向けて考えてみたいですね。

### 発表の機会+創作の場への進化

菅：今年度も残り少なくなってきましたが参加型の展示会も企画されてますか？

堤：毎年、年度末に1本大きな展示会をやるんですけど今年も「Tomoniアートのフェスティバル花さき、誇れ！」っていうタイトルで2月28日から3月3日までやります。去年は県外の作品も多かったんですが、今回はどっかかっていうと県内。発表の機会を創出することはリーフレットにも書いてありますし、それはみなさん望んでることなので。

角：参加する人たちの顔ぶれがよりこの土地に住んでいる人になったのかなと思えました。展示するだけじゃなくて、同時に創作する場も作っていくっていうのは前回から変わったところなのかなと。

堤：ちょっとグレードアップを(笑)



大事ですね。

角：こういう場所を用意することで参加者側からの提案であるとか、参加者同士の交流が生まれてるんですね。まさに実現したい形の取り組みかなと。

### 広域センターに望むこと

角：集客の面ではもう少し工夫していかないとという話をさっきお聞きしましたが、他の面でも困りごとあれば教えていただきたいなと。

堤：一つは、『TASCぎふ』の場所が岐阜駅からバスで20分くらいかかるんですが、場所的に遠いから来れないとか、作品を展示したいけど遠いから展示できない……という声はどうしてもあるんです。で、今年3カ所ので始めたのがアウトリーチで、遠方で作品展を行ってみたい。これも場所を増やしながらやって、全県下に『TASCぎふ』を知ってもらえる機会にできるかなと。

角：遠方サポートも来年度以降も取り組めたいという課題ってことですね。一方で僕たち広域センターに期待すること、取り組みの要望などあつたら知りたいと思ってます。

堤：今年度は初年度ということもあって、私も他の職員も具体的な相談に答えていけないってことも多くて、経験がないというところでは、それをカバーしてくださるような助言なり、いろんな情報を広域センターからもらえたのでそこはホントに広域センターがあつて助か

角：あと2回くらい研修会もあるんですか？

堤：来週がアートと権利を学ぼうということで、弁護士の先生にお願いしています。商品化とか値段のこととか、ここにいるといういろいろ相談ありますね。我々もパッと答えられないのが実際です。なので、我々も勉強しながら進んでいかなきゃいけないと思ってます！



静岡県では今年度より障害者芸術文化活動普及支援事業を実施しています。「認定特定非営利活動法人オールしずおかベストコミュニティ」が事業の受託を受け「静岡県障害者文化芸術活動支援センター」を開設しました。オールしずおかベストコミュニティではこれまで障害のある方の就労支援を通じて一人ひとりの自立を支援してきました。今回、芸術文化活動という新たなコンテンツが加わったことで、また新たな取り組みが生まれそうです。今後の展望について松本支援部長とみらいとの藤田支援コーディネーターにお話を聞きました。

松本克彌（オールしずおかベストコミュニティ）

藤田博史（静岡県障害者文化芸術活動支援センターみらいと）

坂野健一郎（東海北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター）

坂：表彰式の前日に時間を作ってもらいありがとうございます。本日に大丈夫なんですか？

松：長年続いていますから。夕方に準備すれば問題ないですよ。準備自体も出展した施設が自発的に協力してくれるので。

坂：今回で21回目。先ほど、製品を見させていただけましたがとてもバラエティに富んでいます。

松：ええ、子ども用の消防服までありますから

（笑）。

坂：部屋に入った瞬間、一際目立ってました（笑）。出展されている皆さん、発想が柔軟ですよ。

松：ネットワークがあることによって、学び合える環境が整ってきた感があります。隣の施設を見て、ここまでは遊び心を入れられるみたいなことが分かってくる。我々は、ただ工賃が上がればいいではなく、利用者自身の働きがいやそこで働く福祉職員が楽しく仕事向き合える環境づくりを重視しています。

坂：そのためにオールしずおかでは静岡県内の施設や企業を訪問してつなげていったんですね。このネットワークは新たに開設したみらいにも役立つと思うのですがいかがですか。

松：まだ始まったばかりなのでなんとも言えませんが、生かしていきたいと思っています。元々オールしずおかは中間支援を行ってきた団体なので、相談のノウハウもありますし、アート活動に取り組んでいる施設の情報もそれなりにもっています。

坂：情報とネットワークの活用ですね。

松：あとは就労支援の実績があるので、こういった形になるかは分かりませんが、製品化などの出口支援にもつないでいけるのではと。

藤：半面、出口支援だけに特化せずアート活動を

支援する本来の目的も果たしていきたいと考えています。アート活動自体が、社会参加の場になったり様々な接点になったり。それ以上に我々が意図していない新しい可能性が埋まっている気がしますね。

松：実務的に言うと、今までオールしずおかのクライアントは施設単位で個人の相談はあまり受けていなかった。今後は作家本人や家族からの相談が増えてくるんじゃないかな。

藤：実際に早速個人の方からの相談がきています。自身の作品を展示したい・販売したいという相談なのですが、同様の相談は多いですか？

坂：新潟の実績では、センター開設初年度で最も多い相談でした。7割方、売りたい・展示したいでしたね。

藤：ノウハウもない中でどうやって相談に答えました？

坂：私は開設当時違う職場にいたのですが、相談員は困ったようですよ（笑）。作家本人からダイレクトというよりも、施設や家族を通じて相談が来ることを想定していたので。しかもいきなり出口を求められたと。色々考えながら持ち寄り展示会や、創作も展示も販売も自由にできる創作の場などを少しずつ形にしていきました。

藤：なるほど。作家本人からの相談もそれなりにありそうですね。

松：あとは人材育成。年度末にかけて何回か企画しようと思っていて。あまり敷居が高くない

内容が良いんだけど。

藤：まだまだアートは敷居が高いですからね。誰でも側面的にできることとして写真の撮り方なんか良いと思ってるのですがいかがですか？作品の記録や見せ方に意識をもってもらおうという点で。

坂：新潟でも一回やりました。即テクニクにつながるので受講生はそれなりにお得感はあるようです。ちなみにうちのアートディレクターは写真を専攻していますよ。

藤：では早速、研修の日程調整を（笑）。初年度なので他の研修も参加の敷居が低いものを企画したいと思います。

松：人材育成は展示会などと比べると地味なんですけど、でも着実に続けていかないと将来何も残らない。しっかりとやっていきますよ。

坂：継続性は重要ですね。我々もブロックセンターを立ち上げていますが、事業の実績はモデル事業から通算してまだ3年しかありません。どうしても既存のつながりに頼りがちになるのですが、積み上げができないと特定の方や団体のための組織になってしまうなど。新たな人材育成は最も重点的に実施していきたいことです。

松：ただ、人材育成はなかなか単年度では成果が見えてこなくて。本来は中期的な計画を立てて、実施していく必要があるのですが、普及支援事業自体が単年度事業。どうしても単発的な事業になりがちです。年度をまたいだ積

み重ねが課題ですね。

坂：確かに。年度をまたぐと担当者も異動などで変わる可能性もあるので、その部分をつなぐのがブロックの役割かもしれません。先日のブロック会議（11月9日〜10日）で、みらいとのアートディレクター遠藤さんから学生との関り方でもとても良い話を聞きましたよ。継続的に学生を育てていくために有償スタッフとしてアートに関わってもらおうのも一つではないかと。

藤：他県の取り組みや課題を共有できるのは良い機会ですね。私も参加しましたが、作品のデレクションの話は面白かったです。冬季間に開催するのであれば、静岡はお勧めですよ（笑）。

坂：次は福井県で開催します（笑）。実践報告会という形でみらいとさんにもご協力いただく予定です。

松：いつやるの？

坂：3月の中旬ごろを考えています。

松：3月は勘弁してよ（笑）。多分、いろんな事業報告に追われているのが目に見える。

坂：すみません。静岡からだだと片道4時間ぐらいかかりですね。なにせ広いブロックでしていかかりますね。（笑）。でもぎつと楽しい会になると思います。

藤：では、逆に次年度のブロック展示会は静岡で（笑）。まち中に使えそうな会場が結構ありますよ。



これまで新潟県内で障害のある方の創作活動を様々な形で実施してきた『特定非営利活動法人アーツキャンパ新潟』。今年度より新潟県から障害者芸術文化活動普及支援事業の委託を受け『新潟県障害者芸術文化活動支援センターらーと』を開設しました。これまで自由な企画と、それに賛同する緩やかなネットワークで続けてきた活動が、制度として運用されていく中で感じていることを担当の本間さんにお話を聞きました。

本：本間友朗（新潟県障害者芸術文化活動支援センターらーと）  
坂野健一郎（東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター）

本：コーヒーをどうぞ。お湯がまだ沸かないので缶で。

坂：ごちそうさまです。いつも気を遣ってもらって。

本：同じ新潟県と言えども、遠いですからね。なんでそんなにフットワークが軽いんですか？

坂：基本的にこの事業はネットワークづくりとそれを生かした相談支援がベースです。相談が届いてもつなげる先がないと微妙ですし。動いて引き出しづくりはやつといた方がいいかなと。

本：私もそう思います。幸い相談も入りだったので積極的に外に出ていこうと思います。この半年間はイベントをこなすことに追われていて、果たして誰かの役に立っているのか自問自答の日でした。

坂：外から見ている10月〜11月はバタバタとイベントがありましたね。

本：次年度本県で開催される全国障害者芸術・文化祭のプレイベントの位置づけです。やってみて感じたことは、目的やアウトカムよりも体裁や目に見えやすいことが優先されることです。その結果起こってしまったのが、新潟青陵大学で実施した舞台発表。誰も観客がいなくて。パフォーマーも観客も主催者も誰も喜ばないという

事態が起こってしまいました。

坂：本間さん自身、ずっと福祉の現場で働いてきて一念発起して転職した訳です。相当ストレスフルだったんじゃないですか。

本：転職自体は何があっても後悔はないです。ただ、相談から様々な取り組みを作っていくことと、思っていたのに順序が逆になってしまった。一方で新潟県が言っていることも正しいので、その折り合いを見つけることができなかつた感じなんです。我々の一番の弱みは計画性をもって事業を形にしていける指揮系統が分りにくくなつたことです。センター長の近からはもちろん指示が出されるのですが、事業の実施主体は新潟県。違うことを言われたときにどうするか。この判断がストレスでした。

坂：経験してないから分かるようで分からない。ただ、何か頼めば形になるようなネットワークは活動を通じてできてきたと思います。頼まれることの方がいいかもしれません（笑）。新潟県も本間さんたちの事業の管轄は文化振興課ですけど、私たちには障害福祉課から一緒に事業をやりたいという話をいただいていますよ。長岡市で展示会をやったのですが、展示も撤去も4〜5名、職員を派遣してくれました。

本：頼み方・頼まれ方の問題ですね。ぜひうちにも頼み事という指示を出してください（笑）。一部のネットワークじゃだめなんだなって。仲良

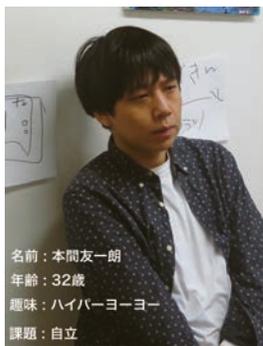
るのもこの仕事の醍醐味かもしれません。育てようと育てて育てられないなら見つけるしかない。

本：そう考えるとわくわくします。あとはお金の使い方がうまくないと。節約とかそういう意味じゃないで、どのタイミングでどのようにお金を使える形で使えるか。効果的なお金の使い方がよく分かりませんね。

坂：相手が困っているときに使えばいいんじゃない（笑）。いやな言い方ですけど。本当に困っているか、効果があるかなど分析は必要です。化けたときは一生恩を忘れないんじゃないでしょうか。仲良しだからみたいなのはNGです。

本：分かりやすいですね。これまでの話を通じて、いやあ、坂野さん、相当悪い人ですね（笑）。質問しているようでところどころ皮肉を混ぜていますし、色々事例を見てきたんだなって。

坂：誉め言葉として、ますます精進します（笑）。本：惚れ惚れするような極悪人になってください（笑）。綺麗ごとでこの仕事はできませんから。私ももっと泥臭く掘り下げて中間支援とは何かを問い続けたいと思います。



名前：本間友朗  
年齢：32歳  
趣味：ハイパーヨーヨー  
課題：自立

レグループで仕事ができるのは幻想だと。今まであった緩やかなネットワークでさえもイベントを実施するための手段として使ってしまった。ネットワークをつくっていくはずの事業が逆にすり減らしてしまったような。

坂：だから12月から実施している展示研修会があるんですね。あのプログラムには本間さんの思いがこもっているように感じました。こういうことがやりたかったんだと（笑）。折角の企画なのに全然案内が發送されず、せかしてしまっすいませんでした。

本：いえいえ、あれ以上広報が遅くなっちゃってしまっていたら新潟青陵大学の二の舞でした。色々と働きかけてくれて感謝しています。毎回20名程度の参加をいただき、一緒に手を動かしています。その中で、様々な声が聞こえてくるんですね。事業所の環境や、作品の楽しみ方など。間違いない、文化芸術の活動人口が増えていく手控えがありますね。福祉から何かアートをきっかけとして利用者の暮らしを、自分たちの地域をもっと豊かにしようとする動きが出てくるのはとても素敵なことだと思います。

坂：とても良い取り組みだと思いますよ。富山県からも参加者が来ていると聞いています。一方で、ネットワークの拡大や個々の資質向上といった側面は成果として伝わりにくくないですか。

本：強く感じますね（笑）。なかなか伝わりません。良い作品を集めて品評会みたいなのをしたらどうかという声も。将来的には必要かもしれないですね。今

は、目に見えにくいところをやらないと。だからこそ中間支援組織であって。

坂：中間支援でなければ、事業所の作家を猛烈にPRして展示会に積極的に出展したりグッズ化したりと別のアプローチでアート活動を広めていくこともできるけど。その役割を見極めることは重要ですね。

本：そう考えると秋口にやったイベントは果たして中間支援として体をなしていたんでしょうかね。県やアートキャンプとしての事業になっていたのではと。

坂：中間支援がうまく機能すれば自然といろんな事業をみんなで作ってあげていく形になっていきますね。時間はありませんが、全国障害者芸術・文化祭もそんな感じでワイワイ楽しくやれるのかも。

本：そうですね。ただ1年事業を実施してみて、中間支援は難しい。単に事務ができればいいわけでもないし、情報も全然足りていない。向き不向きというよりできる人、できない人が公然と出てきますよ。アート活動は普遍的ですが、それを広げていく人は限りなく職人的。アート活動が広がれば広がるほど、職人は枯渇して奪い合いがおきますよ。

坂：それを分かっている時点で本間さんは適任です（笑）。中間支援という分りにくいことに堪えられる・やりがいを持てる・実際にやれる方は少ないかもしれません。今回の展示研修会のような場から輝く方の発掘につながるかも。作家だけでなく、そうしたキーになる方と出会え



「最近描いた5枚です。拙い絵ですが、私にとっては子供のような物で気に入っています……」。昨年7月、事務所のパソコンに届いた一通のメールと添付された作品の写真、それが佐藤さんとの出会いでした。それまで身近な人以外には作品を見せたことがなかった佐藤さんが、自分の手で作品を展示し、作品を介してお客様と会話する機会を自ら生み出すことになるとは、おそらくご本人も想像していなかったことでしょう。佐藤さんに大きな変化をもたらした「ワークショップ」、「もちより展」を振り返ってお話をお聞きしました。

佐…佐藤葉月

角…角地智史（東海・北陸ブロック障害芸術文化活動広域支援センター）

**恩師の言葉に背中を押されて**

角…「もちより展」終わってからどんな風に過ごしていましたか？

佐…家事をやりながら絵を描いたりして、4月に個展をやるのでその準備や打ち合わせをしてました。

角…個展が決まったと聞いて、すぐめでたいな！と。

佐…ありがとうございます。

角…佐藤さんが最初に連絡をくださったのは、去年の夏でしたよね。

佐…連絡するちょっと前に、『アール・ブリュット』という概念を知って、私の絵も出せるかもしれない！と思って、近場でやるところを検索したら、『NASC』（※新潟県アール・ブリュット・サポート・センター・NASC）が出てきたので連絡したんです。

角…作品を展示したいと思ってたんですか？

佐…ざーっと一人で描いて一人で楽しんでたんですけど、中学時代の恩師に「一人で描いてないで、どっかに見せなさい！」って言われたので、

見せる機会とか場所ってあるのかな？と思って検索してみました。

角…佐藤さんはずっと絵を描いてたんですか？

佐…いいえ、中学校の時にちょっと描いたくらいで、それから描いてなくて。ちょうどハガキサイズのスケッチブックを見つけて、このサイズがかわいいなあと買って、新しいペンも買って、スケッチブックとペンがあるから試し書きをしようと思って、試して描いたんだけど、試し書きの領域を超えて（笑）。

角…この絵は試し書きだったんですか？最初から作風が決まっていますね（笑）  
佐…なんとなくペンを走らせていたらこんな作風になりましたね。ちょうど自閉症スペクトラムだった後あたりですね。自分の中で生きづらさみたいなのがあって、ストレス発散じゃないですけど絵でも描こうかなと思いはじめて。もともと作るの好きなんですけど、あんまり器用じゃないので。でも絵なら自分だけの世界だから、これが変でも曲がっててもどうでもいいかなと思って。

**視野が広がり経験値も増えたワークショップ**

角…10月の「もちより展」に向けて行ったワークショップにも参加してくださいましたよね。ワークショップは以前にも参加したことはあったんですか？

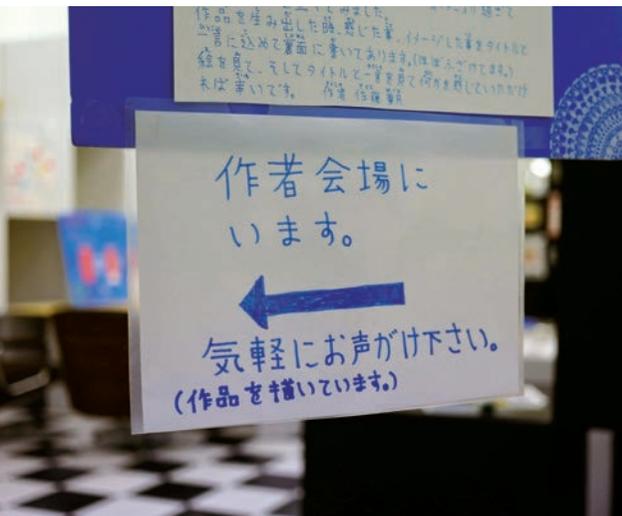
佐…全然なかったです。人様に絵を見ていただくのが初めてで、ワークショップとかそういう繋がり全然なくて、『NASC』さんとの繋がりが初めてでした。

角…キャプション描いたり、展示練習したりとワークショップに参加してみたいかができましたか？

佐…人見知りなのでうまくコミュニケーションがとれるかな？と不安だったんですけど、みなさん優しくしてくださいって、初めての展示も楽しくできましたし、いろんな意味で経験値が増えたと思います。

角…人とかかわるのは苦手だった？

佐…コミュニケーション能力があんまりなくて、初対面の人だと固まった



りするんです。

角.. 実際参加して、当事者の方や親御さん、福祉施設の職員さんとか、様々な方がいらしたと思うんですけどどうでしたか？

佐.. 共同作業をやったことで、すごく距離が縮まった感じがありましたね。段ボールの組み立ては一人ではできないので、あたしこやります！とか、ここやってください！とか、一生懸命コミュニケーションをとって、ちょっとスムーズにできるようになりました(笑)。

角.. 佐藤さんとしては、一緒に手を動かす中で会話した方がかわりやすかったですか？

佐.. 1対1で会話をするよりは、作業をしながらの方が会話はしやすかったです。

角.. 7月は「対話型鑑賞」のワークショップもありましたよね。

佐.. すごく緊張しましたね。もし自分の作品を発表して、これは何か違うとか、変だとか言われたらちょっと嫌だなというのもありました(笑)。

角.. 他の参加者からはどんな言葉がありましたか？

佐.. みんな好意的な意見で、「こういう見方をしてくれるんだ！」とか、そういうのもわかっていますごく楽しかったです。

角.. 例えばどんな見方がありましたか？

佐.. 私の絵は青系が多いので、水を連想させるね...とか。自分では青が好きで青でばっかり描いてただけなので、水を連想させることもあるんだなあと思いました。

角.. だるろう？とか、どんな思いで描いてるんだろ？っていうのがリアルに会話で分かった方がいんじゃないか？と思ひまして。作者と話すことで『オール・ブリュット』とか、障害のこととかに目を向けていただければいいかなと思つて貼ったんですけど、やっぱり緊張しました(笑)。あんまりおしゃべりは上手じゃないけど、作者として、見ている方から感想も聞ききたいですし、こちらも伝えたいことかありましたし。

角.. 佐藤さんにとって、とても思い切った行動だったんですね。佐藤さん自身が、見ているお客さんに伝えたかったことはどういうことですか？

佐.. 私がどんな風に描いてるか、どんな思いで描いてるか、そういうことを伝えたかったんだと思います。

角.. 実際、お客さんと話してみようでした？

佐.. 私の名前「葉月」なんですけど、私の絵を見ているお客さんで、「(作品が)細かくてハズキルーベが必要だわ。あら作者、ハズキちゃんっていうの!! ホントにハズキルーベだわ！」って言うてる方がいらして、それがすごくおもしろくて(笑)。

角.. 「青からの多色へ、新しい扉を開けて」でしたか？

佐.. ちょっと寂しかったですね。寂しくて絵が描

角.. 人から言われて初めて気づくってことありますよね。感想もらって創作に影響ってありましたか？

佐.. 私、作品の裏面に一言書くんですけど、10月の「もちより展」の時にその一言を見てフツツ笑っていたお客さんがいて、それを見て、一言があつて良かったんだな！って。それから裏面の一言も手を抜かず書くようになります。

角.. 「作者会場にいます。」

角.. ワークショップで準備をしつつ迎えた「もちより展」ですが、実際の作品展示は佐藤さんにとってどんな機会になりましたか？

佐.. 自分の絵でも良かったんだ！っていう自信になりましたね。人様にお見せしてもいいんだなと。

角.. 不安みたいなのがあつたんですか？

佐.. あんまり褒められたことがないので、何に対しても常に自信がないというか。人様に見ていただいて感想いただいたことで、絵を描いていて良かったなあと思いました。

角.. 僕は、「もちより展」で佐藤さんが作品の下に「作者会場にいます。気軽に声がけ下さい」という貼り紙をしてた事がとても印象的だったんですけど、なんで貼り紙をしようと思つたんですか？

佐.. 展示してある絵を見て、どんな人が描いてる

角.. けなないというか、描く気になれなくて、空気が抜けたみたいな感じになっちゃってポーンとしてましたね。

角.. フェイスブックにも作品アップしてたと思うんですけど、そこではどんなやりとりをしますか？

佐.. もうちょっと描き込んだほうがいいんじゃないか？とか、そんなやりとりもあつて、人に見せる描き方というか、どういう風に見てもらいたいとか、そういうことを意識して描けるようになりました。

角.. 青のペン以外でも描かれているとか？

佐.. 画材を買いに行つて、この色きれい！と思つて買ったペンで描いてみました。

角.. どんなリアクションがありましたか？

佐.. 青以外も描くんだねとか、この色もきれいだねとか、いろんな感想があつて青以外も使って良かったなつて思いました。コメントもらつて仲間ができたような気がして！ インスタグラムにも自分の作品を上げてるんですけど、海外の方からも結構コメントがきたりして、すごく楽しいなあと思ってます。

角.. いいですね！

佐.. コメントが英語とかドイツ語なので、グーグル翻訳で翻訳して、何となくこんなこと言ってるんだなと思つたらサンキュー！って返信してます(笑)

角.. 活動の幅もどんどん広がっていきそうですね(笑)。4月の個展も楽しみにしてます！

りするんです。

角.. 実際参加して、当事者の方や親御さん、福祉施設の職員さんとか、様々な方がいらしたと思うんですけどどうでしたか？

佐.. 共同作業をやったことで、すごく距離が縮まった感じがありましたね。段ボールの組み立ては一人ではできないので、あたしこやります！とか、ここやってください！とか、一生懸命コミュニケーションをとって、ちょっとスムーズにできるようになりました(笑)。

角.. 佐藤さんとしては、一緒に手を動かす中で会話した方がかわりやすかったですか？

佐.. 1対1で会話をするよりは、作業をしながらの方が会話はしやすかったです。

角.. 7月は「対話型鑑賞」のワークショップもありましたよね。

佐.. すごく緊張しましたね。もし自分の作品を発表して、これは何か違うとか、変だとか言われたらちょっと嫌だなというのもありました(笑)。

角.. 他の参加者からはどんな言葉がありましたか？

佐.. みんな好意的な意見で、「こういう見方をしてくれるんだ！」とか、そういうのもわかっていますごく楽しかったです。

角.. 例えばどんな見方がありましたか？

佐.. 私の絵は青系が多いので、水を連想させるね...とか。自分では青が好きで青でばっかり描いてただけなので、水を連想させることもあるんだなあと思いました。

角.. だるろう？とか、どんな思いで描いてるんだろ？っていうのがリアルに会話で分かった方がいんじゃないか？と思ひまして。作者と話すことで『オール・ブリュット』とか、障害のこととかに目を向けていただければいいかなと思つて貼ったんですけど、やっぱり緊張しました(笑)。あんまりおしゃべりは上手じゃないけど、作者として、見ている方から感想も聞ききたいですし、こちらも伝えたいことかありましたし。

角.. 佐藤さんにとって、とても思い切った行動だったんですね。佐藤さん自身が、見ているお客さんに伝えたかったことはどういうことですか？

佐.. 私がどんな風に描いてるか、どんな思いで描いてるか、そういうことを伝えたかったんだと思います。

角.. 実際、お客さんと話してみようでした？

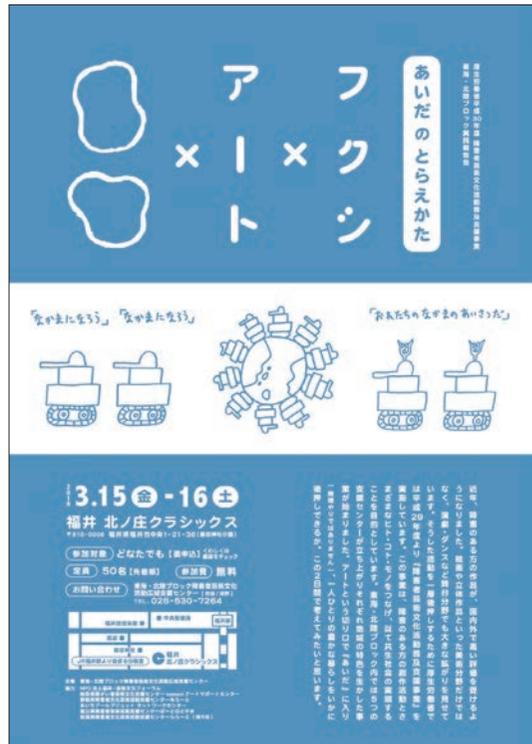
佐.. 私の名前「葉月」なんですけど、私の絵を見ているお客さんで、「(作品が)細かくてハズキルーベが必要だわ。あら作者、ハズキちゃんっていうの!! ホントにハズキルーベだわ！」って言うてる方がいらして、それがすごくおもしろくて(笑)。

角.. 「青からの多色へ、新しい扉を開けて」

角.. ちょっと寂しかったですね。寂しくて絵が描



新潟日報 おとなプラス  
平成 30 年 11 月 21 日掲載  
アール・ブリュットの力



⑤



③



①

《新聞掲載》

- ◎上越タイムス  
平成 30 年 9 月 26 日掲載  
より多様な文化事業へ 10 月 6 日から上越アートプロジェクト
- ◎新潟日報  
平成 30 年 10 月 19 日掲載  
障害者らの展覧会 県内増加「作品評価の契機に」
- ◎新潟日報 おとなプラス  
平成 30 年 11 月 21 日掲載  
アール・ブリュットの力
- ◎福井新聞  
平成 31 年 3 月 7 日掲載

《成果物》

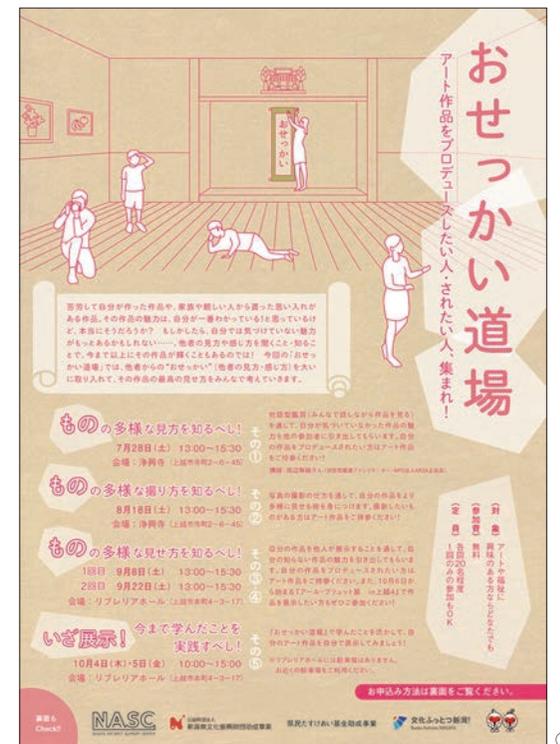
- ①みんなでわいわいあーとなじかん  
～絵を描きたい・作りたい方、集まれ！～
- ②おせっかい道場  
～アート作品をプロデュースしたい人・されたい人、集まれ！～
- ③上越アートプロジェクト わからないの居場所
- ④障害ある方の創作に係る事例検討会
- ⑤あいだのとらえかた フクシ×アート×〇〇

《情報発信》

- [Facebook ページ]  
いいね数 509 件  
記事投稿数 32 件  
総閲覧数 32,154 人  
(平成 30 年 6 月 14 日～平成 31 年 3 月 29 日)  
記事最高閲覧数 822 人  
内容 イベント広報／展示会周知
- [ホームページ]  
総閲覧数 4,709 件  
(平成 30 年 6 月 14 日～平成 31 年 3 月 29 日)  
掲載記事数 6 件  
内容 展示会・創作の場・研修などの開催告知



④



②

発行日 2019年3月  
企画・編集・発行  
社会福祉法人みんなでき

発行責任者：大島 誠  
デザイン：小出真吾 (IDEKO)  
写真：角地智史 他  
イラスト：ワタナベメイ

東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター  
〒943-0834 新潟県上越市西城町 2-10-25-307  
社会福祉法人みんなでき 内  
TEL：025-530-7264 FAX：025-530-7261  
MAIL：info@niigata-artbrut.net  
HP：http://niigata-artbrut.net/

本書は厚生労働省  
「平成30年度障害者芸術文化活動普及支援事業」  
の一環として制作しました。

## 成果と課題

東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センターが開設され2年が経ちました。平成30年度はブロック内に県域センターが5つ設置され、今まで以上に新たな出会いやつながりができました。活動を支えていただく方が増えた分、その期待に応えるためにより広域的な活動にシフトしていく必要があったなかでこの1年間の成果や、今後の課題を下記のとおりまとめました。

### 成果について

#### 1 広域センターの役割

県域センターが平成29年度の1つから5つに増えたことによって、各地の取り組み状況や情報の集積を行う必要がありました。特に今年度から県域の障害者芸術文化活動普及支援事業の実施主体が都道府県に移管されたこともあり、スタートアップに不安があったためセンター開設前の情報収集には特に力を入れました。各県の担当者からも積極的に問い合わせをもらい準備を進めていきました。連絡会議も今年度は昨年度の反省を踏まえ、8月に第1回目、11月に第2回目と早い時期に開催したことによって県域センターの担当者同士のつながりをつくることができました。

#### 2 未実施県へのアプローチ

平成29年度は巡回訪問を中心に未実施県への支援を行いました。今年度は未実施県で障害のある方の創作活動を積極的に取り組んでいる団体と協力して研修会を開催しました。全国の都道府県が特色を生かしつつ普及支援事業に取り組んでいただくことが理想ですが、地域毎の状況を踏まえたアプローチが必要です。県域センターがなくても実施できることとして研修会を実施することにより、作家本人や家族・施設間のネットワークをつくることができました。

### 今後の課題について

#### 1 中間支援組織のあり方

みんなできではモデル事業から通算して3年間、障害のある方の創作活動に関わってきました。中間支援組織として自らの団体のための活動ではなく外に向けた相談支援や人材育成、ネットワークづくりなどを実施してきました。新たなつながりができていく一方で、センター設置初期のころから関わってくれた特定の個人や団体などへの支援の偏重が出てきました。従来のつながりを大事にしつつも、新たな層へのアプローチがないと一部の活動になってしまい広がっていきません。中間支援組織としての役割を常に確認し、事業を実施していく必要があります。

#### 2 成果の伝え方

中間支援は展示会や発表の機会といった直接的な内容のものもありますが、基本的には間接的な事業です。我々が側面的に支援した先がどうなったかということが成果として重要となってきます。具体的には人材育成や有機的なネットワークづくり、さらにその先の地域の変化や共生社会の実現などがあげられますが成果が見えるまでに時間がかかりかつ数値化が難しい項目となります。ただ、このことを言語化したり視覚的に示すことができない限り普及支援事業の意義は一般的に広がっていきません。効果的なアーカイブの方法などを整理していく必要があります。

#### 3 地理的側面

東海・北陸ブロックは8県にまたがり、広大な面積を有しております。地理的に、どの県も集まりやすい中心となる地域がなく時間的にも金銭的にも移動コストがかかります(例えば我が法人の拠点がある土越妙高駅から三重県津市までは片道最短で5時間かかります)。県域センターの予算も各県によりバラつきがあり会議の出席一つをとっても大きな負担になることがあります。ブロック単位で会議や研修会を企画しても、物理的に参加できないことも想定され県域センターから望まれた事業にならないおそれがあります。ある程度、ブロック単位では県域センターに対する移動に関わる金銭的な補助が必要です。またブロック内の複数団体によるコンソーシアム方式でのブロックセンターの運営やブロック外から支援を受けたほうが効果的な場合があると考えます。

#### 4 求められている事業

ブロック会議などの意見を含めると東海・北陸ブロックにおいては、ブロック研修会(権利保護・アートディレクター養成研修)のニーズは低かったです。研修よりも定期的にブロック内の県域センターの担当者が顔を合わせる機会がほしい、もしくは展示会などの機会と一緒に手を動かしたいといった要望が多かったです。県域センターの声に裏付けされた事業を企画・実施していく必要があります。



## 報告書

厚生労働省  
「平成30年度  
障害者芸術文化  
活動普及支援事業」

東海・北陸ブロック  
障害者芸術文化活動  
広域支援センター